# 理事長登壇⑮

# 荒川清美理事長に聞く

巻頭を飾る「理事長登壇」も15回目。今月はこれまで執筆された各理事長による日本協会への要望に対しての回答、そして新年度開幕というタイミングを合わせて、日本協会のけん引者・荒川清美理事長に〝登壇〟願った――。

――「理事長登壇」を毎月読まれて、どう感じられるか

**荒川理事長**　地域社会に貢献しようとする底辺の活発な動きを知り有りがたいことだと思っている支部、地区などの組織の多くは有志の自発的行動によって発足するケースが多いようだが、今後は各都道府県協会も、積極的に市協会、町協会などの育成を心がけて欲しい。

――地方振興策、底辺対策を望む声が強いが、

**理事長**　日本協会施策としてももちろん考慮しているが、やはり〝未開発地〟に対する普及は、各都道府県協会が指導者の派遣などでまずバックアップすべきだと思う。日本協会という大きなかたまりが、いきなり小さな単位を対象とするとかえってマイナスな面も生じる。

日本協会レベルで底辺のための事業として考えているのは、クラブの全国組織化と好カードの地方進出（転戦）、公認指導員制度、ブロック別講習会などだ。

――クラブの全国組織化とは、

**理事長**　例えば、全国各県一斉に4～9月までの間に「県内クラブ大会」を行い、10～11月に「ブロッククラブ大会」、そして、12月にブロック代表による「全国クラブ大会」を開くといったものだ。

去年から、日本協会登録に一般Cを設け、クラブの実態をつかみつつある。

勝負だけのハンドボールではなく、ハンドボールを通じて〝人間交流〟を企っていくのが、底辺施策の基本思想だと思う。

――PR対策がもう一歩足りない、という意見も強いが

**理事長**　消極的かもしれないがPRすべき価値と力のある事業を計画し、実行できなければ根のしっかりとしたPRにはならないと思う。一時的にマスコミへ話題を提供するだけで、すぐ消えてしまってはマイナスだ。

現段階では「報道関係に信頼される競技団体となれ」をモットーとして動いている。

――ところで、理事長は、新年度の抱負として「国内体制の強化」をあげているが

**理事長**　これは、各層にわたっての組織づくりという意味だ。前述のクラブ大会もその一つだし、少年ハンドボールの育成に対しても、系統だてたい。

各都道府県協会には、日本協会を支える組織であるということを改めて認識してもらいたいし、ブロックという単位も、ただ国体の予選などを開くだけの存在ではなくどしどし事業を進めて欲しい。

例えば、ブロック選抜、ブロックジュニアなどを編成し強化活動を行ってくれれば、日本協会の頂点強化も大いに助かるし、広い範囲で人材をチェックできる。

――近年、日本協会事業の巨大化、国際化はめざましいものがあるが、運営体制、運営感覚に〝新しい波〟が必要ではないか。

**理事長**　旧来の体質だけではたしかに、すべてを乗り切れない。

法人化の研究を進めているのもその一つの現れだ。各分野をプロジェクト化し、専門委員を拡充したら、とも考えている。

――日本の場合、学連、実連、教職員連といったヨーロッパなどにない団体がある。これらと日本協会の関係は今後どうなるだろう

**理事長**　それぞれの連盟は基礎もできあがっており、長い慣習もあるが、日本協会の細胞はあくまで都道府県協会である。加盟団体会議といったものを造って、日本協会施策に側面援助してもらうようなつきあいかたをしたい。日本協会とはなれた加盟団体間事業―例えば学生×実業団、実業団×教職員、学生×自衛隊対抗戦なども考えて欲しい。

全日本のチャンピオンシップ（総合選手権）は各都道府県あるいは各ブロックのチャンピオンによって争うように改正を思案中だ。

――4選の任期も後半、将来構想を最後に聞かせて下さい

**理事長**　「事業収入の安定化」をなんとか考え出したいし、女性（OG）を運営面、競技面（トレーナー、レフェリー）へ登用するムードをつくりたい。

頂点強化については、全日本A、B、ヤング全日本の「三段階システム」を確立したいし。「3部（技術審判）普及・合同・会議」は少々時間がかかっても、権威のある機関として成長させるつもりだ（4月15日・体協スポーツマンクラブにて。文責編集部）

「ハンドボール」

**49年5月号（第119号）目次**



【表紙写真】スタジオンIF（デンマーク）×全日本。自信たっぷりな佐藤の7MT（4月8日京都・撮影・光島磯雄）

# 五輪女子に3大陸（アジア・アフリカ・アメリカ）代表を

## 日本協会 ＩＨＦへ公式提案決める

日本協会は、4月20日の月例常務理事会（東京）で、モントリオール・オリンピック（昭51）の女子出場国として、3大陸（アジア、アメリカ、アフリカ）の代表1ケ国を認めるよう、ＩＨＦ（国際ハンドボール連盟）に要望することを決めた。今秋の第15回ＩＨＦ総会の議題に公式提案手続きをとる。

モントリオール・オリンピックの女子は、6ケ国の総当りによって行われ、その出場国は、開催国・カナダと来年12月キエフ市（ソビエト）で開く第6回世界女子選手権の上位5ケ国に内定したと伝えられているが、日本協会では、かねてから「大陸」無視のこの法式に疑問を抱き、ＩＨＦに対し、再検討を望む道を研究していた。

一方、アジア大陸選出のＩＨＦ理事渡辺和美氏(日本協会副会長)は、現在の実力分布から、世界選手権の上位5ケ国は、いずれもヨーロッパ地域に独占される可能性が強いとして、今春3月、アメリカ大陸選出のビューニング理事（アメリカ）、アフリカ大陸選出のファダリ理事（エジプト）と談合した。

その結果、モントリオール・オリンピック女子の出場国を「開催国、世界女子の上位4ケ国、3大陸代表1」と共同提案することにまとまった。

渡辺ＩＨＦ理事は、月例常務理事会でこの旨を説明、田村会長はじめ出席した各常務理事も異議はなく、今秋10月4、5日ヴェニス（イタリア）で開かれる第15回ＩＨＦ総会へ公式提案することに決まったもの。

ＩＨＦは、その役員構成などから、ヨーロッパ偏重の施策が目立つだけに、この提案が認められるかどうかは、五分五分だが、渡辺ＩＨＦ理事の話では「ホグバーグＩＨＦ会長（スウェーデン）も理解を示しており、見通しはある」といっている。

この案が通れば、第6回世界女子選手権後に3大陸でそれぞれ予選を行いその勝者が集って、一つの代表権を争うことになる。

なお、この日の会議でＩＨＦ規約を「大陸選出の理事は自動的に常務理事となる」よう改正提案することも決めた。

## まずコーチ陣を選出

### 新頂点強化すべりだす

日本協会技術部は、4月21日東京で新年度初の全国委員会を開き今後の男女頂点強化対策について約5時間にわたり話しあった。

その結果、2月の全国会議（評議員会、理事会）で議決された頂点施策のプロジェクト化にそって早急に新しい方向を打ち出すことを決め、男女ナショナルチームの監督各1名をノミネート、両監督と渡辺（慶）技術部長によって、4月中にコーチングスタッフの候補者をリストアップ。執行部の承認を受けたのち、ただちに、49年度男女ナショナルを選衡するという基本線を決めた。

これによって、注目の新ナショナルチームは、早ければ6月初旬にスタートできそうである。

選手数については、日本協会・荒川理事長が構想としている24名以内を守ることになるが、欧州式にＡ、Ｂに分けての強化は日本の実情に合わぬのではないか、との意見もあり、当分の間、24名を一括し、機をみて、Ａ・Ｂに二分する方法が採られそうだ。また、一般へのアピールとして49年度ナショナルを、男女とも「モントリオール第一次候補選手」と呼ぶことは確定的である。

## すべて全日本が対戦か

### 今秋の東ドイツ交流

日本協会は、4月20日の月例常務理事会で、今秋の第1回東ドイツ招待(男子、日本体協交流事業)につき協議、8月29日来日、9月9日帰国の12日間の日程で5〜6試合、原則として、日本側の対戦チームは、すべて全日本とすることを申し合せた。

試合地については、東京2、名古屋1、関西地区2とし、東ドイツ側が6試合を了解した場合は関西地区で3試合を行う予定。

**3部合同 初会議**　注目の頂点強化新機構・3部（技術、審判、普及指導）合同会議の初会合は、4月15日東京で開かれた。

前日に予定された技術部委員会が21日に繰り下がり、強化施策についての具体的な協議は行えず、同会議の今後の運行について話しあったにとどまり、まとまった決定は特になかった。各部から推せんされたスタッフは次のとおり。

技術＝渡辺慶寿、北川勇喜、近藤金博、審判＝安藤純光、岡前義春、佐野和夫、普及指導＝宮本西嗣、山田哲雄、高田日呂美

## 8月29日から4日間
# 初の全国教員養成大学研修会

日本協会は、文部省の補助をうけることが決まった「全国教員養成大学ハンドボール研修会」の実施について検討を進めていたが、このほど、今夏8月29日から9月1日までの4日間、東京・オリンピック記念青少年総合センターで行うことを確定、近く運営実行委員会を発足、要項を発表する。

同研修会は、ハンドボールの攻防理論、同技術、審判技術など受講者が大学卒業後、ハンドボール指導者として必要な知識を修めるもので、日本協会（普及指導部）と全日本教職員連盟が、数年前から検討を進めていた。

このため、今年度からの実施にあたっては、日本協会と全日本教職員連盟が中心となって運営（実行）委員会編成をして行うことになり日本協会側責任者に4月1日付で新任した宮本普及指導部長を決めた。

## 全国高専大会
# 自主開催か

全国高専体育協会々長・木村作治郎氏（舞鶴工専校長）は、3月22日、日本協会を訪れ、今夏に日本協会が計画している第1回全国高専ハンドボール大会につき、大要次のような見解を述べた。

**木村会長談話**　現在、高専の全国的なスポーツ大会は、陸上競技バレーボールなど7種目による「全国高専総合体育大会」と、サッカー、ラグビーのように、競技団体（日本協会）と全国高専体協が共催しているものとの二つがある。

総合体育大会への参加は、全国63校（注・国立52、公立4、私立7＝昭和49年3月1日現在）のすべてで部活動していることが最低条件だ。ハンドボールは、日本ハンドボール協会の調査によると33校に部があるそうだが、〝総体〟には加えられない。

サッカー、ラグビーの場合は、参加校（選手、監督）に対し競技団体が旅費、宿泊費の一部を負担してもらうことを高専体協が要望それを受けいれてもらっている。ハンドボールの場合も、是非、この点を考慮して欲しい。このような条件を一切つけずに大会を開くことももちろん可能だが、それはあくまで、競技団体の独自事業であり、高専体協が共催、後援、協賛することは難しい。　◇

＜解説＞日本協会では、普及指導部が中心となって2～3年前から〝高専対策〟を検討していたが、渡辺(五)理事～北信越選出～の調査によって、全国で33校が部をもっていることが判った。

同時に多くの学校が、試合相手に恵れぬ点や、全国大会の開催を要望した、などから、今夏、第1回の全国高専大会の開催を前向きに検討、全国高専体協のバックアップを要請中だった。

木村会長の談話は、日本協会側に少からずショックを与えており独自事業として踏み切るかどうか早急に結論をまとめることになった。

高専体協側が、主として経済面に条件をつけているのは、木村会長によれば「高専は予算面で余裕がなく、生徒も環境に恵れていない者が多い」との理由からである。

日本協会・荒川理事長は「高専にハンドボールの芽を生やすことは普及策の一つにもかかげられており、今年はムリとしても、来年度以降は、予算化できるものかどうかを検討したい」といっているが、なお曲折が予想される。

また、仮に63校にハンドボール部が揃っても、総合体育大会の規模が広がりすぎるなど、現時点でも高専体協はかなり難題をかかえているといわれ、すんなりとハンドボールが実施種目に加えられるとは思えない。

結局、日本協会としては、当分の間、自費（全額）参加できる学校だけを集めて大会を開き、実績を重ねながら、高専体協の共催を得るよう働きかけることになりそうだ。

なお、今夏、第1回が行われるとすれば、8月、新潟協会の主管によって同県内で開かれる公算が強い。

# 実業団選抜（女子）韓国へ

全日本実連は、5月18日から韓国で行われる第4回日韓女子社会人交流に遠征する選手団（役員3選手14）の名簿を、4月5日別掲のように発表した。

代表選手は、有力実業団の中堅クラスを揃え、久保(田村紡)、市川(東京重機)、岩井(大崎電気)、宮崎（ブラザー工業）ら4人の48年度ナショナルプレイヤーが含まれている。

また、新設チーム・立石電機（熊本）から植原、篠田の両選手が選ばれているが、これは大洋デパート（熊本、廃部）時代の実績を買われたものだ。

日韓女子社会人交流は、日本と韓国で一年おきに開かれ、第3回大会は、今春3月韓国ジュニア選抜が来日して行われたばかり（本誌前号既報）。3回の通算成績は日本側の14戦8勝1分5敗。

今回は5試合の予定だが、来年の第6回世界女子選手権を前に韓国の実力を探る意味で注目される。

一行は5月17日出発、26日帰国（いずれも大阪国際空港）の予定。

**訪韓全日本実業団女子選抜軍**

| 役職 | 氏名 | 年齢・所属 | 身長 |
|---|---|---|---|
| 団　長 | 富永　劭 | （全日本実連常務理事） | |
| 監　督 | 鈴木　義男 | （田村紡監督） | |
| コーチ | 福本　弘 | （大崎電気女子監督） | |
| GK | 久保　徳子 | （21　田村紡） | 161cm |
| | 西村富美子 | （20　大崎電気） | 166 |
| FP | 阿部　照子 | （23　日本ビクター） | 165 |
| | 蓮見　彰子 | （22　日本ビクター） | 163 |
| | 鈴井あけみ | （21　日立栃木） | 160 |
| | 桜庭　郁子 | （19　日立栃木） | 155 |
| | 原川　美保 | （21　ブラザー工業） | 160 |
| | 宮崎　桂子 | （20　ブラザー工業） | 164 |
| | 植原　千鶴 | （21　立石電機） | 153 |
| | 篠田　亨子 | （21　立石電機） | 164 |
| | 横山　明子 | （20　田村紡） | 160 |
| | 市川　千晴 | （23　東京重機工業） | 158 |
| | 岩井　悦子 | （22　大崎電気） | 156 |
| | 遠藤　昌子 | （21　東北ムネカタ） | 150 |

# 全日本、地力を示して一矢むくう

## 洗れんの攻守　スタジオン（デンマーク）が4勝

恒例の新シーズン開幕国際親善試合は、デンマークの「スタジオン・イドレッツ・フォルニンゲン・コペンハーゲン」クラブ（ヘンリクセン団長ら17名）を招き、3月31日から4月8日まで、各地で5試合を行った。

近代ハンドボール発祥の地といわれるデンマークの男子1部リーグで、最近3シーズンに2回優勝している「スタジオン」はフランドセンらナショナルプレイヤー4人を軸に、洗れんされた攻守を見せ静岡、愛知の両教員と、二和家具（岐阜）の東海勢を連破、オリンピック代表4人をもつ全大阪にも勝ち4勝をマークした。

しかし、京都で対戦の全日本には、さすがに一歩をゆずり、結局4勝1敗の成績で4月11日夜羽田から帰国の途についた。デンマークチームの来日は初めてだった。

## 前半、一気に勝負つける

第1戦・静岡県教員団との試合は3月31日午後3時40分から清水市営体育館で行われた。審判＝鈴木城、大橋昭重、観衆＝約千五百

スタジオン・IF　20（12—2、8—5）7　静岡県教員団

| 得 | 【スタジオン】 | | | 【静岡】 | 得 |
|---|---|---|---|---|---|
| 0 | L.ピーターセン | GK | GK | 山口 | 0 |
| 0 | オルセン | GK | GK | 富田 | 0 |
| 1 | フランドセン | FP | FP | 入山 | 0 |
| 3 | L.ニールセン | FP | FP | 杉山 | 4 |
| 0 | T.ヨルゲンセン | FP | FP | 寺田 | 1 |
| 3 | B.ヨルゲンセン | FP | FP | 井上 | 0 |
| 5 | クリステンセン | FP | FP | 小林 | 0 |
| 5 | ラスミュゼン | FP | FP | 竹内 | 1 |
| 1 | ジェンセン | FP | FP | 矢吹 | 0 |
| 2 | O.ニールセン | FP | FP | 板倉 | 1 |
| 0 | B.G.ピーターセン | FP | FP | 原 | 0 |
| 0 | ブロゴールト | FP | FP | 細沢 | 0 |
| 20 | （4） | | 7MT | （7） | 7 |

▽交代【静】FP望月（得0）

後記　杉山　茂（NHK運動部）

○……スタジオンは、これまで来日したヨーロッパチームとはちがい、力にまかせたプレーをあまり見せず、フットワークを活かした巧みなディフェンス突破で得点をあげた。

3分の先取点は、フランドセンの巧妙な配球から左サイドのクリステンセンが倒れこんであげ、4分の2点目は、速攻でフランドセンが決めたもの。いずれも、巧さと速さを武器とする静岡教員団のお株を奪ったような攻撃だった。

○……静岡の立ちあがりも悪くなかった。

0—2のあと6分、竹内が鋭く切りこんでアンダーシュート、9分3—1とされたが10分杉山がサイドからバウンズシュートをわかせた。

しかし、このあとスタジオンの採った守りはみごとだった。

静岡がサイド、中央（45度）を使い分けてゆさぶる策戦とみるやサイドをがっちりマン・ツウ・マンで固め、中央部は、むしろチャンスを与えてシュートを射たし、それを長身とリーチを活かしてははじき返したのだ。この網に、静岡のシュートは、前半だけで7本も引っかかっている。

○……守りが安定すると、スタジオンは攻撃にもいっそう余裕が生まれ、速攻、ポストプレー、カットインプレーなどで静岡ゴールを襲い15分6—2、20分9—2と点差をあけた。

特に16分GK（ピーターセン）からクリステンセンへ渡したワンパス速攻は鮮やかで、試合後、アンデルセン監督は「ウチの得意なプレー」と云っていたところをみると、かなり、日本的な戦法をこなすチームと見てよいだろう。

○……ポストからの得点は、静岡のディフェンスに完全にマークされながら体で押倒してノーマーク同様としたあと射ちこんだもの。観戦中の全日本・北川勇喜監督は「ヨーロッパチームが日本に対してとる常套手段だ」と説明してくれたが、このプレーをいかにチャージングに誘うか、が日本側の課題であろう。

○……後半も同じような展開だった。静岡は、10分すぎGKがピーターセンからオルセンに代ったスキをついて杉山、寺田、板倉らがポイントしたが、前半の劣勢をくつがえすには程遠かった。スタジオンは、最後までロングシュートを飛ばさず、かならずアシストをともなう組織攻撃で得点した。

### ユニホームにスポンサー名

□……スポンサー名をつけたユニホーム。日本ではご法度だが、ヨーロッパでは、今や〝常識〟で、スタジオンも、堂々？前面に「SKS」、背面に「スパーレカッセン」と銀行の名を染めて遠征してきた。

ヘンリクセン団長の話では、この銀行から通常の活動はもちろん今回の訪日にも経済的援助を受けており、デンマークの一部リーグの所属クラブには、ほとんどスポンサーがつき、ユニホームなどでその企業宣伝をしているそうだ。

援助額は「ノーコメント」だったが、消息通は一シーズンで二万クローネ（約百万円）ぐらいではないか、とみている。

スタジオンは前日到着の疲れもみせず，静岡教員団を相手に豪快なプレーを見せ第1戦を飾った。クリステンセンの鮮やかな切りこみによるジャンプショット　（静岡新聞社提供）

# 巧みな変化攻撃、固い守備

第2戦・二和家具（岐阜）との試合は4月3日午後6時40分から岐阜県民体育館で行われた。審判＝岡田重博、田島静　観衆＝約二千二百

スタジオン・IF 17（8―3 / 9―3）6 二和家具

**後記**　二和は、立ちあがりスタジオンの動きの鈍さをついて2分長谷川（新人、法大出）5分足立がゴール、2―0と先行8分2―2に追いつかれたものの15分伊丹の巧技で再びリード、場内をわかせた。

| 得 | 【スタジオン】 | | 【二和】 | 得 |
|---|---|---|---|---|
| 0 | L.ピーターセン | GK | 新村 | 0 |
| 0 | F.オルセン | GK | | |
| 2 | フランドセン | FP | 足立 | 2 |
| 1 | ブロゴールト | FP | 長谷川 | 2 |
| 1 | L.ニールセン | FP | 高木 | 1 |
| 0 | T.ヨルゲンセン | FP | 斎藤 | 0 |
| 0 | B.ヨルゲンセン | FP | 古川 | 0 |
| 4 | クリステンセン | FP | 伊丹 | 1 |
| 1 | ラルセン | FP | 北上 | 0 |
| 4 | O.ニールセン | FP | 水谷 | 0 |
| 2 | B.G.ピーターセン | FP | 伊藤 | 0 |
| 2 | ラスミュゼン | FP | 田中 | 0 |
| 17 | （2） | | 7MT（0） | 6 |

しかし、突進力に優るスタジオンは、15分すぎからフランドセンが鋭い切りこみをみせて二和守備網を崩しクリステンセン、ニールセンらが思い切ったシュートを射ちこみ16分同点のあと、連続4得点と7MTで27分には8―3とたみかけ点差を開いた。

二和も、果敢に攻めこんだものの、上背、リーチのある相手のディフェンスラインを突破できず、立ちあがりにみせたクイックプレーも封ぜられて、3点目から4点目をあげるまでに21分間もかかってしまった。

スタジオンは、後半若手中心のメンバーに切り替えたが、B・G・ピーターセンのえぐるようなシュートやクリステンセンのカットインプレーなど、巧みな変化技でチャンスを活かし10分11―4、15分13―4、20分14―4と順調に加点した。

第1戦につづき、この日も欧州勢特有のロングシュートはあまりみせず、フットワークを使った攻撃が主体でいかにも7人制ハンドボール発祥国の巧者らしい試合ぶりと云えた。

二和は終盤、高木、足立がゴールをあげたにとどまった。（Y）

## スタジオン・IFコペンハーゲン 来日選手名簿

▽団長　ヴァン・ヘンリクセン（35才）
▽監督　フィン・アンデルセン（34才）
▽チームリーダー　オーレ・クリステンセン（コーチ兼任・45才）
▽選手

| | | 年令 | 身長 | 体重 | 職業 |
|---|---|---|---|---|---|
| GK | ◎ラッセ・ピーターセン | (26) | 190cm | 92kg | 造船工・ |
| | フィン・オルセン | (23) | 184 | 83 | 医大学生・ |
| FP | ペル・ブロゴールト | (22) | 184 | 84 | 理工大学生⑤ |
| | ◎ヨルゲン・フランドセン | (29) | 185 | 84 | 電気技師⑬ |
| | ライフ・ニールセン | (31) | 185 | 75 | 機械工⑦ |
| | ◎トニー・ヨルゲンセン | (21) | 182 | 83 | 会計士⑦ |
| | ◎ベント・ヨルゲンセン | (29) | 180 | 84 | 金融業⑥ |
| | フランク・ラルセン | (20) | 183 | 80 | 写真現像師① |
| | ○レヌ・クリステンセン | (22) | 174 | 77 | 電気技師⑭ |
| | クラウス・アンデルセン | (23) | 184 | 87 | 法科大学生③ |
| | ボー・G・ピーターセン | (22) | 184 | 83 | 税理士⑩ |
| | ブライアン・ラスミュゼン | (28) | 178 | 73 | 教師⑧ |
| | フレミング・O・ジェンセン | (23) | 182 | 79 | 教大学生① |
| | オットー・ニールセン | (22) | 182 | 79 | 機械工⑦ |

・右欄○内数字は日本での得点（全5戦）
・◎印はデンマークナショナル（フランドセン，T・ヨルゲンセンは五輪出場）
・○印はデンマークナショナルB

# 鮮やかGKピーターセン

第3戦・愛知教員（愛知）との試合は4月4日午後3時40分から愛知県体育館で行われた。審判＝稲石三二、奥村方志　観衆＝約二千

スタジオン・IF 20（8―1 / 12―6）7 愛知教員

| 得 | 【スタジオン】 | | 【愛知】 | 得 |
|---|---|---|---|---|
| 0 | L.ピーターセン | GK | 竹内 | 0 |
| 0 | F.オルセン | GK | 水藤 | 0 |
| 2 | ブロゴールト | FP | 斎藤 | 2 |
| 6 | フランドセン | FP | 松浦 | 2 |
| 1 | L.ニールセン | FP | 長縄 | 1 |
| 3 | T.ヨルゲンセン | FP | 深津 | 2 |
| 1 | B.ヨルゲンセン | FP | 飼沼 | 0 |
| 4 | クリステンセン | FP | 川口 | 0 |
| 0 | ラルセン | FP | 角 | 0 |
| 1 | O.ニールセン | FP | 細川 | 0 |
| 2 | B.G.ピーターセン | FP | 細井 | 0 |
| 0 | ジェンセン | FP | | |
| 20 | （3） | | 7MT（0） | 7 |

**後記**　改田　智洋（朝日新聞名古屋運動部）

〇……あまりにも力の差が違いす

ぎた。このため前半で試合の興味はなくなってしまった。スタジオン・IFの攻撃力はさほど見るべきところはなかったが、GKのラッセ・ピーターセンの守備は見事だった。守備範囲が広いばかりか、前のFPをうまく指導していた。また、若いFPが凡ミスを犯すと顔をまっかにしてしかりとばす。この闘志もチームをふるいたたせるのにおおいに役立っていた

○……立上りはスタジオンもペースがつかめなかった。しかし愛知教員の動きに慣れるとヨルゲン・フランドセンが中に切り込みだした。5分、ニールセンが7MTを失敗したあと、このフランドセンが中央にワンドリブルでカットインし大きくジャンプして先取点をあげた。フランドセンは前半5点（7MT2本を含む）をあげたが必ず中央を割って入ってのジャンプシュートだった。

○……後半はGKピーターセンを最初からはずし、フランドセンもベンチへさげた。戦力を完全に落してしまったのだ。それでも得点差は開くばかりだった。

愛知教員は春休みを利用して韓国に海外遠征するばかりか、太田団長を軸に毎夜合同練習を積んだそうだが、攻めがあまりにも単調すぎた。前半の得点は飼沼―長縄と渡るスカイプレーであげた1点だけ。スタジオンのディフェンスは、中央が堅く、そのうえ上からのシュートがまず決まらないということが前半の10分過ぎですでにわかっていながら攻めの変化を見せなかった。早いパスワークでもう少しゆさぶり、サイドからのシュートを多用するなど、もっと攻めに工夫がほしかった。こんな愛知教員のなかで、GK竹内だけは光っていた。3本の7MTを防ぐばかりか、再三好守備を見せた。愛知教員は、一口にいってGKの活躍にFPがむくいてやる力がなかったということだろう。

（第4戦は次頁に掲載）

### ハンドボール専門のクラブ

□……スタジオンは、ヨーロッパのスポーツクラブにはめずらしくハンドボール専門。

16才から58才までの会員350人をようし男女とも実力別、年令別に16グループに分け、今回来日したチームは、いわゆる一軍。選手権などで活躍するのを目的に編成されている。

昨年と一昨年の優勝でファンも増え10月第2週から翌年3月第3週までかかって開かれる全国リーグのホームゲーム9試合の純益は100万円近い。

一軍の練習は週3回、シーズン中はこのうち1回が試合にあてられる。ジュニアはこれまで6回優勝しているが、女子は実績がない。

## 全大阪　終盤の反撃実らず

第5戦（最終戦）・全大阪との試合は4月8日午後6時から大阪市中央体育館で行われた。審判＝井上裕人、望月伸三郎　観衆＝約一千八百

スタジオン・IF 17（10―10, 7―6）16 全大阪

【全　大　阪】

| | 選手 | 所属 | 得 |
|---|---|---|---|
| GK | 本田 | （イーグルス） | 0 |
| GK | 今井 | （湧永薬品） | 0 |
| FP | 木野 | （湧永薬品） | 1 |
| FP | 福井 | （イーグルス） | 0 |
| FP | 早川 | （イーグルス） | 3 |
| FP | 高橋益 | （湧永薬品） | 3 |
| FP | 有永 | （福島ク） | 1 |
| FP | 池本 | （イーグルス） | 3 |
| FP | 森 | （湧永薬品） | 4 |
| FP | 穂積 | （湧永薬品） | 1 |
| FP | 戸田 | （湧永薬品） | 0 |
| FP | 津川 | （湧永薬品） | 0 |
| | 計 | 7MT（0） | 16 |

【スタジオン】

| | 選手 | 得 |
|---|---|---|
| GK | L.ピーターセン | 0 |
| GK | F.オルセン | 0 |
| FP | フランドセン | 1 |
| FP | L.ニールセン | 2 |
| FP | T.ヨルゲンセン | 1 |
| FP | クリステンセン | 1 |
| FP | アンデルセン | 3 |
| FP | O.ニールセン | 0 |
| FP | B.ヨルゲンセン | 1 |
| FP | B.G.ピーターセン | 6 |
| FP | ラスミュゼン | 1 |
| FP | ブロゴールド | 1 |
| | 計　7MT（1） | 17 |

▽交代【大】FP入江（枚方ク）野波（大阪体大）、高橋精（大阪イーグルス）、GK川原（大山商会）＝いずれも得0

### 後記

小山敏昭（共同通信社大阪運動部）

○……最後はスタジオンが1点差で逃げ切ったが、白熱したゲームだった。

前全日本選手の有永を加え、湧永、大阪イーグルスのメンバーを中心とした全大阪。立ち上がりは懸念されたコンビネーションのミスも目立ったが、木野、早川らリードオフマンの巧みなパスや動きでペースをつかみ、昨年、一昨年とデンマークリーグで優勝した強豪スタジオンと互角に渡り合った。

○……先手を取ったのがスタジオン。全大阪のミスを突き、1分ニールセン、2分ヨルゲンセンが決め2点を先行した。だが全大阪も木野の好シュートから勢いに乗り池本、森らが連続得点。結局前半を終り10―10と追いつ追われつの緊迫した試合を展開し、勝敗は後半に持ち込んだ。

ところが後半に入ると全大阪は気のゆるみがあったのか、攻守に乱れを見せた。1―5のディフェンス陣が早いパスでゆさぶられ、またオフェンスもハンドリングが悪く、シュートもGKピーターセンの好守に阻れたりで10分過ぎまで無得点。地力のあるスタジオンがこの好機を見逃すはずはなくあっさり4点をアヘッドしてしまった。

○……反撃に出る全大阪。15分過ぎから早川、森がゲットして2点差まで追い上げ、終了間際には木野のロングパスを高橋が決めて1点差。場内大歓声に包まれたが、ついにタイムアップ。とうとう最後まで後半立ち上がりの失点を挽回することは出来なかった。

速攻や小ワザのプレーは見られないスタジオンだが、体の使い方体力、腕力を生かした強シュートなど本場の迫力を十分に感じさせてくれた一戦だった。

### どちらが素顔？スタジオン

□……デンマークではハンドボールは国技扱い。二千近いといわれる男子チームにあって、全国リーグ1部の10クラブともなれば、実力、人気ともたいしたもの。

ましてや、スタジオン・IFは昨年、一昨年同リーグで優勝（今シーズンは18戦10勝8敗・4位）ヨーロッパ球界でも、かなり高い評価をうけているチームだ。

□……西ドイツ各クラブが敗れた全日本には是非勝ちたいと、来日直後から第4戦に焦点を合わせ、さらに全大阪には4人のオリンピック代表が居ると聞いて新たな闘志を燃やした。

東海筋での3戦は、日本の春を楽しみながら余裕を示し、受け入れた地元協会は、さすがマナーがいいとほめていたが、全日本に敗れたあとは正に豹変、大阪でも荒れた試合を見せ関係者やファンの顔をしかめさせた。これほど評判の分かれた来日チームも珍しい。

# 全日本、一方的に攻めまくる
## 粗雑にすぎたスタジオン

第4戦・全日本（第8回世界選手権代表）との試合は、7日午後3時10分から京都府立体育館で行われた。審判＝岡本克彰、藤本昇　観衆＝二千四百

全日本 21（11－8、10－2）10 スタジオン・IF

| 得 | 【全日本】 | | | 【スタジオン】 | 得 |
|---|---|---|---|---|---|
| 0 | 本田（大阪イーグルス） | GK | | L. ピーターセン | 0 |
| 0 | 柳川兄（大同製鋼） | GK | | F. オルセン | 0 |
| 1 | 花輪（大同製鋼） | FP | | フランドセン | 5 |
| 1 | 菊池（早大） | FP | | L. ニールセン | 0 |
| 7 | 木野（湧永薬品） | FP | | B. ヨルゲンセン | 1 |
| 2 | 佐藤（本田技研） | FP | | T. ヨルゲンセン | 3 |
| 6 | 藤中（大同製鋼） | FP | | ブロゴールド | 1 |
| 0 | 大江（三菱レ大竹） | FP | | クリステンセン | 0 |
| 0 | 村田（法大） | FP | | O. ニールセン | 0 |
| 3 | 柳川弟（大同製鋼） | FP | | ラスミュゼン | 0 |
| 0 | 夏目（三重教員） | FP | | アンデルセン | 0 |
| 0 | 中井（大同製鋼） | FP | | B. G. ピーターセン | 0 |
| 20 | （10） | 7MT | | （2） | 10 |

後記　　杉山　茂

○……全日本の快勝だった。先取点こそ7分ヨルゲンセンに奪われたが、8分木野で同点してからはチャンスを確実に活かし、藤中のすばらしいジャンプショットなどで加点、特に20分をすぎてからは進境いちぢるしい柳川弟の速攻などで一方的に攻めまくり、あわよくば全勝で帰国をもくろんだスタジオンの望みを打ちくだいた。

○……スタジオンは、この一戦にすべてをかけて来た感じで、ヘンリクセン団長以下、異常な高ぶりで会場に着いた。これまで、日本側の受けいれにまったく注文をつけなかったのだが、この日は「両チーム12人ずつ。ハーフタイムにはレモンを。使用球は皮製に変えられないか……」などと多く、試合直前になって「開会式が予想より長く、体が冷えた。試合開始を10分遅らせてくれ」。

○……一方の全日本は前日の名古屋大会後、「あの程度の相手ならダブルスコア」と自信たっぷりだった。世界選手権で東欧勢のすさまじいばかりの当りと激しいプレーに耐えてきた余裕を感じとるに充分。

試合中、特に目立ったのは、少々スピードがあってもシュートコースが甘ければディフェンスラインではね返すだけの守備力を身につけていることと、荒っぽいプレーにひるまず、互角にわたりあえるだけの〝ゲームスタミナ〟がどうにかチームに備わってきたところだ。花輪がヒザの故障で欠場した中井の穴を埋め、フルタイム無難にこなしたのも収獲。

○……個々で光ったのは、全日本では木野、藤中佐藤、本田のベテラン組。なかでも木野の発らつとした動きはみごと。後半15分から25分までの連続4点は、独走、バウンドミドル、ロング、それにスカイプレーと彼ならではの多彩な〝独演会〟。

○……スタジオンではやはりフランドセン。カットイン、カットアウトの使い分けが実に巧妙で、ディフェンスラインを惑わせた。シュート力もあり、パワーを備えたテクニシャンと云える。193cm、94Kの巨漢・ルント（ミュンヘンオリンピック代表）が、負傷で来日しなかったが、彼が参加していれば、その力と、フランドセンの技で、試合運びはかなり違ったものとなったろう。T・ヨルゲンセンはマークされて動けず、名手ピーターセン（GK）も、この日はまったく精彩がなかった。

○……それにしても、近来になく荒い試合だった。日本選手は攻防両面で何回となく突きとばされて転倒。スタジオンは判定のたびに不満な表情を露わにした。

試合後の記者会見でクリステンセンコーチは「7MTと思われるプレーをすべてフリースローにされた」と怒っていたが、理由はどうあれ、投げやりなプレーで、個人技だけの展開、粗暴から自滅という試合ぶりは北欧の名門らしくなかった。

斗志が空廻りしたスタジオンをつく全日本・菊池の攻撃（撮影・光島）

# 日本実業団リーグ（男子）、5月25日に開幕

〝6チーム総当り、6都市転戦、4週7日間にわたる〝ペナント・レース〟——初のサーキット化に踏み切った全日本実業団男子選手権が「日本実業団リーグ」と銘打って5月25日いよいよその幕をあける。この試みがもし成功すればヨーロッパなみの「日本選手権リーグ」（仮称）の実現も有望となろう。

各地のファンも、是非会場に出向いて大会を盛り立てて欲しい。

本誌では、記念すべき初大会のスタート台に立った6チームの抱負、選手名簿、それに見どころなどを特集した。

## 大同製鋼中心の優勝争いか

＜みどころ＞選手権のサーキット化——「地方ファンにも好試合を」という日本協会の施策をまず、全日本実連が手がけることになったといえる。一試合々々、全日本級の選手を中心に、好内容を期待できるし、長期戦の妙味もからむが、焦点はやはり優勝争いだ

当然のことながら前年度4大タイトル独占の大同製鋼（愛知）が軸。藤中、中井両エースのほか花輪、柳川兄弟が世界選手権へ行ってすっかり自信をつけた。それに野田、加藤、松原。簡単には切り崩せない堅城を誇る。

対抗は湧永薬品(大阪)。木野はじめキャリア豊富な巧者揃いだけに、コンディショニングでは随一の力があるとみたい。

穂積、津川の大経大コンビと、今井一人のＧＫ陣に福井が加ったのも大きい。両者は第4日で顔を合わすが、この一戦が最大のヤマではなかろうか。

ダークホースは本田技研。大味な試合運びがもろさにつながっていたが、柳の加入で締まり、バランスがとれてきた。

世界選手権個人得点2位・佐藤のプレーは今大会話題の一つ。

大崎電気(埼玉)、三景（東京）も闘志を燃やしている。

短時日の一本勝負では、ベテラン中心だけにスタミナ不足を露すが、長期戦になれば、その考巧さが武器。特に大同戦、湧永戦はもつれそうな気配である。

大江の引っぱる三菱レ（広島）はメンバーの若さが気になるが、波に乗れば侮れぬ力を示そう。

（次頁の名簿は本誌調べによる非公式なもの）

### 日本実業団リーグ日程

| 日程 | 対戦 | 会場 |
| --- | --- | --- |
| ・5月25日(土) | 本田技研—三菱レイヨン大竹<br>大崎電気—大同製鋼 | (愛知県体育館) |
| ・5月26日(日) | 大同製鋼—本田技研<br>大崎電気—三菱レイヨン大竹 | (愛知県体育館) |
| ・6月1日(土) | 三景—湧永薬品<br>三菱レイヨン大竹—大同製鋼 | (大阪市中央体育館) |
| ・6月8日(土) | 三菱レイヨン大竹—三景<br>大同製鋼—湧永薬品 | (大阪市中央体育館) |
| ・6月9日(日) | 三景—大同製鋼 | (岐阜県営体育館) |
| | 大崎電気—本田技研 | (四日市市営体育館) |
| | 湧永薬品—三菱レイヨン大竹 | (山口県岩国市) |

（注）次の試合の日程（月日，会場）は4月下旬に決定される。

本田技研—湧永薬品
三景—大崎電気
本田技研—三景
湧永薬品—大崎電気

### ——初のサーキット—— かくたたかう

＜大同製鋼・昨年度優勝＞待望のリーグ戦化実現だが、長期の日程を考えると、スタミナ、ペース造りが問題となる。精神的にも緊張状態に全員をおくことが不可能なため、どう乗り切るかの調整を考えて戦いたい。

戦力的には、昨年度とほとんど変わらず、新人も即戦力にはならないので、若手がどこまで成長するかを楽しみにしたい。

昨年は、幸運にも、全日本総合をはじめ、すべての全国大会で優勝することができたが、今年は必ずしも勝てるとは限らず、原点に戻って「追われる」のではなく参加全チームを「追う」つもりで無心に戦いたい。

＜本田技研鈴鹿・昨年度2位＞これまで弱点とされた守備力を強化するため、今シーズンは1日3時間の練習、ミーティングで、この面を重点的にとりいれ、個人技の向上のためには徹底したマンツウマン訓練、チーム技としてはフットワーク、マーク、激しさなどを反復してきた。

また、これまでの大会とちがい一気に波にのるということが難しそうなので、各試合にベストをつくせる精神力も養ったつもりだ。

チーム自体がまだ若いだけに、相手とのかけ引きにおくれをとる不安もなくはないが、全員一丸となっての闘志、粘り強さによって是が非でも、初のサーキット化による記念すべきリーグ戦を優勝で飾りたい。

＜大崎電気・昨年度3位＞初の3週間に亘る転戦が行われようとしているが、初めての試みでもあり各チームとも、それぞれ意欲を燃やしていることだろう。我々は、各地で待つファンに対し、また、初めてハンドボールを観る人々に対しても、けして上面ばかりのプレーではなく、中味のあるプレーを展開することにより、好まれるチームを目指し、ややマンネリ化しつつある実業団チームにあってハンドボールの底辺を拡げる意味でも、新鮮な気持ちで、基本にかえり、見応えのある試合を……をモットーに臨みたい。

また、初のサーキット化を成功させる意味でも、今後のハンドボール界の普及のためにも、最大の闘志をもって臨む所存だ。

＜湧永薬品・昨年度4位＞実業団各チームの力が向上し、攻防の激しさも手伝って、疲労による故障者が多数出たこれまでのシステムとちがい、サーキット化は、各チームとも、次の試合までに充分態勢を整えて出場でき、満足のいくゲームができると思う。

昨年は、大同に全タイトルをさらわれたが、今年こそと、その奪回に闘志を燃やしており津川、穂積、福井の新加入によって、チームは大型化、これまでのコンビネーションプレーをさらに前進させスケールの大きいハンドボールの

完成を目標としている。シーズンオフにはサーキットトレーニングで体力養成、特に防禦力をいっそうつけるようつとめた。各ゲームで、最大の力をだせるよう心掛けたい。

〈**三景・昨年度5位**〉うちのチームは不断の練習によって培れた〝頑張り〟で一戦々々をだいじに戦うことをモットーにしているが、今大会は、特に長期戦でもあり、この点をいっそう自覚し臨むつもりだ。

もち論、勝つことが第一の目的であり、今シーズンは新人の力も高く自信のある陣容を布けた。

しかし、実業団の試合というのは独得のカラーがあり、新人たちが、いかに早くチームやその展開になじめるかが一つのカギではないかと思う。

これは、お互い手の内を知りつくしている各チームいずれにもあてはまることで、新戦力がリーグ優勝の行方を左右する大きな要因になりそうだ。すでに〝チーム造り〟の段階へ入り、燃えている。

〈**三菱レイヨン大竹・昨年度6位**〉今シーズンは、3名の新人加入があり、また、最近1～2年に入社した若手の進境もあって、昨年に比較すれば、層も厚くなり、総合戦力は向上したと考えている。

しかし、他チームも補強されているようであり、彼我の戦力はむしろ開かれてしまっている可能性もある。厳しいシーズンになりそうだ。それらのチームに対して、勝点をあげることは至難とも思えるのだが、一応、目標を次の2点において臨むつもりでいる。

①最低1勝をあげる②失点をできるだけ少くする。――サーキット法式移行が、底辺拡大の布石となるためには、よい試合をすることが必要であり、そのためにも二つの目標はぜひ達成したい。

## 日本実業団リーグ選手名簿（KはGK、FはFP、背番号、氏名下の数字は身長、○印新人（　）内出身校）

### 大同製鋼（愛知）

部長　畔柳　藤男
監督　中浜　大輔
コーチ　野田　清
マネ　更谷　章二

◇
K1 柳川　清 175
12 倉谷　栄治 172
F2 野田　清 169
3 藤中　憲二 179
4 加藤　友弘 183
5 中井　武三 181
6 松原　光三 180
7 花輪　博 178
8 石川　幹夫 173
9 北村　光次 175
10 守田　宜生 169
11 更谷　章二 163
13 柳川　実 175
14 桐山　保 168
15 中本　満明 184
（新加入者なし）

### 本田技研鈴鹿（三重）

監督　松岡　富夫
マネ　加藤　玉陽

◇
K1 細野　秀男 178
12 ○牧原　元則 174（名城大附属高）
F2 勝田　明 171
3 佐藤　要二 180
4 田上　敬三 178
5 新実　俊夫 181
6 ○柳　隆司 179（法大）
7 長谷川　裕 175
8 加藤　玉陽 168
9 宮川　俊英 179
10 矢野　充彦 169
11 新野　弘行 169
13 高木　徹 173
14 近藤　昭二 165
15 豊田維佐夫 184
16 ○斎所　博美 174（水俣工高）

### 大崎電気（埼玉）

部長　辻本　正義
監督　井上　素行
コーチ　籏野　俊彦

◇
K1 岩下　利久 176
F2 飯田　誠行 187
3 東　一敏 180
4 谷口　俊郎 178
5 佐藤　章治 177
6 荒井　正人 178
7 沢田　富男 177
8 坂口　健二 167
9 前渕　正義 183
10 新田　明 173
11 ○井手　信一 170（法大）
12 ○小松原保彦 177（早大）
13 ○橋本　隆三 177（法大）
14 ○江森　正彦 170（国学院栃木高）
15 ○酒井　義男 170（口加高）

### 湧永薬品（大阪）

部長　湧永　儀助
監督　村中　明郎
コーチ　市原　則之
マネ　松井　正敏

◇
K1 今井　敏之 178
12 ○福井　秀人 178（中京大）
F2 市原　則之 181
3 木野　実 181
4 菅　広明 178
5 森　嗣雄 170
6 高橋　益夫 165
7 戸田　栄一 170
8 松井　正敏 168
9 藤井　康之 176
10 ○津川　昭 180（大阪経大）
11 大山　和男 176
13 田中佑次郎 171
14 ○穂積　豊彦 180（大阪経大）

### 三景（東京）

部長　田村信太郎
監督　江名　英彦
コーチ　喜田　健男

◇
K1 西牧　健二 176
12 佐藤　寿仁 174
15 小林　利男 173
F2 佐々木健一 171
3 加藤　正博 178
4 高梨　豊 172
5 内藤　正美 172
6 植田　健一 174
7 上平　義則 173
8 高森　英明 174
9 喜田　健男 176
10 ○大森　一男 172（日体荏原高）
11 ○山村　佳生 176（中大）
13 ○川島　一雄 178（法大）
14 ○保谷　馨 168（日体荏原高）
16 ○塩田　正弘 174（中大）

### 三菱レイヨン大竹（広島）

部長　新藤　泰久
監督　木下　弘重
コーチ　沖重　順陸
マネ　渡辺登美江

◇
K1 藤本　茂 173
12 村本　満春 165
F2 田中　博 172
3 善本　敏雄 177
4 岡村　春男 167
5 山川　重徳 165
6 岩本　宏道 172
7 大江　隆夫 172
8 中島　増男 173
9 池田　正洋 164
10 末広　順彦 179
11 沖重　順陸 172
13 ○重村　誠 183（岩国工高）
14 ○武田　浩一 180（岩国工高）
15 ○大林　武則 172（岩国工高）

## 立石電機さっそう

旧大洋デパート勢をそっくり移籍させて発足した女子実業団・立石電機（熊本県山鹿市）が、新シーズン開幕を待ちかねていたようにデビュー、2戦2勝して関係者を喜ばせた。

日本・デンマーク国際親善試合の京都大会（4月7日）、大阪大会（8日）の前座試合に、ブラザー工業(愛知)、田村紡（三重）と対戦したもので、選手にとっては昨秋の千葉国体以来、6ケ月ぶりの〝実戦〟だった。

垂水、米、小原の3名手は結婚などで脱けたが、島田を主将に、山下、蔵田の世界選手権代表をはじめ、紀野(大分東高)、根岸（熊本女高）の両新人、大崎電気から転入した和田（世界選手権代表）ら16人は元気いっぱい。

井監督（元大洋監督）は、「販売から生産の仕事へ急転換、気疲れもありますが、ようやく落ち着きました。まだ、六分のデキなのに勝てたのは幸運―」と控え目だが、大洋の誇ったフェア・スピード・ダイナミックの伝統をみごとにうけつぐ試合ぶりだった。

▽第1戦（京都府立体育館）

立石電機（熊本） 14（8－1、6－5）6 ブラザー工業（愛知）

▽第2戦（大阪市中央体育館）

立石電機 15（7－6、8－7）13 田村紡（三重）

☆★☆★☆★☆
# 海外トピックス

杉山　茂
（NHK運動部）

## キエフの5連勝成らず
### ～女子ヨーロッパカップ～

各国チャンピオンチームによる第13回女子ヨーロッパカップの決勝戦、スパルタク・キエフ（ソ連）×SC・ライプチヒ（東ドイツ）の試合は、4月7日オポーレ（ポーランド）で、約四千五百の観衆を集めて行われ、SC・ライプチヒが劇的な逆転を演じて12―10で勝ちスパルタク・キエフの5連勝を阻んだ。

本誌前号のあと、準決勝でライプチヒはアイントラクト・ミンデン（西ドイツ）を9―8、22―8で、キエフはラドニッキ・ベオグラード（ユーゴ）を14―8、14―12で破り決勝へ進出していたもの

試合は、キエフがボブルスの活躍で着実にリード、前半3点差をつけたが、後半になると、ライプチヒの激しいあたりに動きを封ぜられ加点できず、クレッシユマーヘルビクらの追いこみをうけて9―9、そのあとライプチヒはユグハンスの活躍で2点をあげ、8年ぶり（2度目）の優勝を決めた。

キエフの5連勝、ソ連代表による第7回以来の連勝記録はいずれもストップした。

SC・ライプチヒ（東ドイツ）　12（5―8、7―2）10　スパルタク・キエフ（ソ連）

◇

一方、第14回男子は、世界選手権終了後、準決勝から再開。2連勝を狙うMAI・モスクワ（ソ連）と王座奪還にもえるVfL・グンメルスバッハ（西ドイツ）が勝ち残り、4月21日ドルトムントのウエストファーレンホールで対決する。

4月19日現在、一万枚の入場券は売り切れ、準決勝・グンメルスバッハ×CH・ブラチスラバ（チェコ）戦の一万二千五百人を上廻る大観衆がつめかけそうだ。（＝次号詳報）

▽準決勝第1戦

VfL・グンメルスバッハ（西ドイツ）　16（8―6、8―9）15　CH・ブラチスラバ（チェコ）

オプサル・オスロ（ノルウェー）　13（7―5、6―5）10　MAI・モスクワ（ソ連）

▽同第2戦

VfL・グンメルスバッハ　15（8―6、7―4）10　CH・ブラチスラバ

MAI・モスクワ　22（11―7、11―6）13　オプサル・オスロ

## ユーゴが優勝飾る
### ～東ドイツ女子国際～

世界選手権後初のビックトーナメント、東ドイツ女子国際カップは6カ国が参加、4月ベイムで行われ女王・ユーゴが2引分を強いられながら無キズで優勝した。得点王は23点をあげたM・トルティ（ユーゴ）。

東ドイツ　11―8　チェコ
ハンガリー　16―11　ソ連
ユーゴ　18―14　ポーランド
ソ連　22―8　ポーランド
東ドイツ　21―15　ハンガリー
ユーゴ　16―11　チェコ
東ドイツ　13―10　ポーランド
ハンガリー　12―11　チェコ
ユーゴ　9―7　ソ連
ポーランド　16―10　チェコ
ユーゴ　12（分）12　ハンガリー
ソ連　13―11　東ドイツ
ハンガリー　19―13　ポーランド
ユーゴ　11（分）11　東ドイツ
ソ連　16―7　チェコ

【順位】①ユーゴ3勝2分②東ドイツ・ハンガリー3勝1分1敗④ソ連3勝2敗⑤ポーランド⑥チェコ

## 西ドイツリーグ終盤へ

西ドイツチャンピオンを決める〝ブンデス・リガ〟（全国リーグ）はいよいよ終盤、今シーズンから南地区は10、北地区は9クラブ参加となり総試合数はあわせて162という長期戦、全日程を終えた北地区はTUS・ウエリンホーヘンが15勝3敗で1位、グンメルスバッハが2位、GW・ダンケルセンは3位ハンブルグ・SVは9勝9敗で6位。南地区はTV・フッテンバーグとFA・ギョッピンゲンが1―2位、南北1、2位でこれから熱狂の決勝トーナメントだ。なお、2部落ちしていたTHW・キールは北部地方リーグで18戦全勝して優勝。全国リーグへ復活が有望である。

**OSCRが優勝**　昨秋来日した西ドイツ女子、OSC・ラインハウゼンはニーデルハイン地域リーグで今季も18戦13勝3分2敗の好成績をあげ優勝（2連勝）

5月1日から始まる西部クレーコート選手権（屋外7人制）での活躍が期待されている。

**ルーマニアが勝つ**　アメリカ大陸から3ケ国が参加して話題を集めたラテンカップトーナメントはこのほどテラモ（イタリア）で行われ、ルーマニアが2軍を送りながら優勝した。2位はフランス、3位スペイン、4位に初めてイタリアが食いこんだ。

注目のカナダは7位、南米からはせ参じたブラジルは6位、アルゼンチンは最下位（9位）だった

# 「頂点強化対策」は総点検が必要

## ～～ このままではベスト8は夢だ ～～

日本協会で国際渉外を担当する光島磯雄常務理事が頂点強化対策について根本から再検討を要望する一文を寄せた。光島氏はミュンヘンリオンピックにつづき今春の世界選手権を観戦，日本の現状を栄養不良症状であると診断した。執行部の一員，いわゆる体制内部から出たこの「反省と将来への提言」につき，読者の意見を待ちたい。

**光 島　磯 雄**
（日本協会国際担当常務理事）

第8回男子の世界選手権大会（2月28日〜3月10日東ドイツ）を見学し世界の気運に接した感想を記しておきたいと思う。

全日本チームはメンバー決定がおくれたため練習期間が十分になくコンビ不馴れな点もみられたが総体的にはトレーナー、選手ともあたえられた条件のもとで良く戦ったことを最初に記しておく。とりわけ対ソ連戦では大会6試合のうち最も良い内容を示してくれたことも披露しておく。

しかしながら私は全般的に考えて、現在の頂点強化対策の再検討は絶対に必要であるとの感を胸一杯に抱いて帰国した。以下又してもの感があるが、古くて新しい問題の提起を面をおかしてのべてみることにする。

モントリオール対策の一環としてのスタートで我がチームは第12位の成績に甘んじた結果に終ったが、世界の大勢と照らし合わせた上で今後の見通しは如何？と問われると私としては真に残念ながら10位以内に食い込むという希望的な条件を見出すことははなはだ困難であるとしか申し上げられない。その理由をあげてみる。

**(1)国際試合経験の不足**

ミュンヘンオリンピックの経験者3名にしてもその公式国際試合出場歴は木野50回、中井28回、本田41回でこの程度では欧州では珍らしいものでなく、この3名にしても手入れを欠かせば錆びてくるのは当然であり、ましてやこの3名以外の新参加者がいかに当惑するかは一目瞭然ということになる。いかに体格、技術、体力にすぐれた人材を選抜し、すぐれたコーチがついて合宿練習をしたとしても、海外遠征による国際経験すなわち武者修業を積まぬ限り全く問題にならないことを再確認した。アメリカやアフリカに勝てるうちは12位は保証されるであろうがそれも時間の問題である。ちなみに国内行事の国際試合も含めて48年度の全日本チームの国際試合数は3月9日現在で12回である（対ユーゴ4、対イスラエル2、世界選手権6）。今回の大会でも、ある時は超一流のプレーを示し満場の大喝采を浴びるかと思うと、他の時には日本国内では絶対にせぬような凡ミスをおかし失笑を買うという現象はミュンヘン時にもみられたことであるが、この凡ミス及び失点を少なくするという基本的な問題を解決出来ない状態での（新人が海外での雰囲気は特別なものという重圧感を抱くうちは）大会派遣は選手にとって気の毒である。このことは従来のように、大会開幕前に数回外国チームと対戦することによって慣熟し解決出来る性質のものではないのである。

とにかく現在までのように年間5回に満たぬ国際試合経験数では今後飛躍的に向上をのぞむことは絶対に不可能であり、万年12位に留らざるを得ないであろう。8位への壁は非常に高くけわしいが、これが克服打開には一にも二にも国際試合経験数の増加（年間最低40試合!!）以外に途はないと断言する。一方幸にして日本ハンドボールのゲーム態度は他国にくらべて真にフェアーで好評を得ていることも事実であるが「強さ」「たくましさ」「粘り強さ」「かけ引き」においては国際ハンドボール界では〝高校の部〟に相当する。もっと皮肉に言えば、模範生徒であるが惜しむらくはハンドボール的に慢性栄養不良症状を呈しているのだ。それにもかかわらず選手達は限られた条件のもとで真に良くたたかっている。しかし国際試合雰囲気での慣熟不足のため失点し、凡ミスを生じ、もう一歩というところで試合を失なうという状態に関しては、明らかに日本協会が責任を感じなければならないと思うのである。

**(2)チーム人員12名は当を得たものでない**

これは次に記す財政と関連することであるが、12名しか派遣出来ない事情はあるにしても明らかに頂点強化に矛盾する問題として考えざるを得ない。わかり切ったこ

とながら12名の枠の欠陥を列記してみよう。

(イ) 負傷者、疾病者の発生は確実であり、その補充の幅がせまくもし中軸的選手に故障が生じたらもうそれまでである。

(ロ) 7対7の攻防戦練習が出来ないという技術的難点。

(ハ) チーム力というものは人数カケル経験数によっても表現されるゆえ、12名の場合第8番目以下を起用した場合たちまちに支障を来たすことになる。長期的な視野でのメンバー改訂も考えられない。常にゼロから出発するような不安感がつきまとうのである。

(ニ) 指導スタッフが思い切った戦法をとれない。不安感が去らない。

少なくとも指導スタッフが余裕ある精神状態を保てるよう対の攻防戦練習が可能な人数は確保してやるべきである。医師、マッサージ、通訳、記録採集要員など欲を言えばキリがないが、せめて試合に直接関係する「戦える人数」だけは外国と対等にすべきである。

**(3) 財政的問題点**

国庫（日体協）の補助金なども先細りの状態にあり、今後ミュンヘン以前の程度の強化策さえも思うにまかせぬという先行きになるとなればどのように対処すれば良いのか？ 今後数年間の行事予定をみても重要行事が目白押しに続いており、それに要する費用の調達も至難事であり、頂点強化のためどれかの部門をしわよせしても良いという状態でもないことは周知の事柄である。他の種目団体はどのようにやっているのか？アマチュアリズムを高くかかげるのは結構だが、ニッチもサッチも行かなくなるようなアマチュアリズムでは困る事態が来ると思う。

頂点強化の意義目的の認識を新たにして、この際根本的な改善を考えなければ、再三言うごとく万年12位であり、参加することにのみ意義を感じておれば良いのである。

次に強化対策改善の部分的案として思うことをあげてみる。

(イ) 有力な選手は有力な実業団に吸収してもらうようにする。大げさな表現であるが、全世界は日本のスポーツの中核は実業団であることを知りぬいているのである。

(ロ) 過去のスタッフの頭脳、経験実力、功績を再評価し、強化に最大限に活用するための処遇法を研究する。（村田、竹野、宇津野、大西、近森氏ら）

(ハ) 学生を全日本チームとして選ぶ場合は、少なくとも卒業後数年間は実業団に入って努力精進を続ける決心と覚悟のある人物でなければ無意味である。折角派遣してもハンドボールに関係のない進路を進まれては元も子もないのである。

(ニ) 全日本チームの選衡基準をより一層具体的なものにして人材発掘に便利なようにする。

(ホ) 海外遠征は協会直轄のみでなく、実業団主体性で「下請け」してもらうようにする。いわば費用負担の肩替りの意味もあるが、経験増加に努力してもらうと考えれば背に腹はかえられないのである。

(ヘ) 有力有能な選手をハンドボール留学させる窓口を持つこと。近森氏の例もあり、西独ならば可能である。

(ト) IHF理事渡辺和美氏の活動をより一層高く評価し今後共相互に意志の流通を円滑化すること。現在の日本協会において渡辺氏の他に誰がIHFに地歩を占めることが出来るかを考えれば、有能なるハインツ・ブラッシュ氏（渡辺氏の駐欧秘書）の存在とあわせて日本の利益につながるよう最大限に活用し相談すべきである。

今回の危機（注・アジア予選への参加問題）の収拾にも渡辺氏は重要な役割を果たされたことをも認めなければならない。

**(4) 審判について**

今回のレフェリーは12ケ国の26人が選任されチュニジア組が初めてヨーロッパ以外の地域から選ばれて担当した。しかし、本当によく動き、明確に吹笛し正しい判断力を示していたのは、スウェーデン、西独(BRD)、DDR(東独)の3ペアで、あとの連中はあまりとるところなし。7米投のとり方（エリア付近でのとび込みに対応する動作としての防禦）には理解に苦しむ場面がみられた。今後国際レベルでの吹笛に資質（会話、専門用語、交際）を有するレフリーの育成と海外派遣については、前記の選手に対する対策同様に審判部の頂点強化推進として前進を開始してもらいたいものである。

以上長々と書いたがこれらの問題の中には想像以上の困難、障害がともなうものが多々あろう。又はそれほどまでしなくともと考えられる向きもあろうかと思う。しかし日本ハンドボールの直面する壁をいかにして乗りこえるかについて、もう一度頂点強化対策を洗いなおしてみる意味であえて問題を提起した次第である。

小さな枝流があつまって山をくだり、谷をめぐり、野をはしり、洋々たる大河となって海へそそぐように、我がハンドボールも小異をすて大同団結の実をあげ、我々の子孫のために大きな夢を持とうではないか。（了）

# 木野実選手
## 公式国際試合に50回出場
## 日本選手では初めて

日本協会は、日本選手として初めて公式国際試合出場50回を記録した木野実選手（FP、27才、湧永薬品、寝屋川高―立教大出）を4月7日京都府立体育館で行われた全日本×スタジオン・IF（デンマーク）戦の開会式で表彰、田村正衛会長から記念のトロフィーを贈った。【カットは今春3月、世界選手権出場の際、東ドイツ紙「スポーツ・エコー」に掲載された木野選手の似顔（アラアゼウスキー氏画）】

☆木野実選手おめでとう

☆日本協会の男子7人制公式国際試合総数は64。木野はその8割近くに名を連ねている勘定だ。近年の全日本の歴史は、彼なくしては語れないことになる。

オリンピック採用で急増した公式戦、その時に現役であった幸運。そういえば、彼には運がある。勝運がある。スターとは、そういうものなのかもしれない。

☆プレーもそうだが、ユニホームを脱いでも、彼は冷静で的確な判断力を示す男だ。

「50試合の表彰、嬉しいですよ。でも、僕がやっと到達したんではダメ、いちばん若い選手にこのくらいのキャリアが欲しいです。欧州では70試合をこして一人前、100試合がザラです。ベスト8への壁こんな処にも感じるなァ」

☆公式国際試合という耳なれない言葉が聞かれるようになったのは4年ほど前からだ。

ヨーロッパの新聞社からの問合せに、編集部が慌てて資料をととのえた。それまで、日本協会はこういうことに無頓着。

チームスポーツに個人単位の表彰は無用という考えが、長くはびこりすぎてもいたのである。

☆3年前のスウェーデン戦あたりから、全日本の各選手にファンがつきはじめた。

木野評はクールな男、であったプレーがスマート、あの脚がいいといった女性ファンもいる。

選手間の信望も厚い。7日、日本協会とは別の〝表彰式〟があった。

チームメートがおこずかいを出しあって記念品を贈ったのである。

☆「50試合のうち、最初に出た選手権(昭42)、44年のタシマイダンカップでユーゴに勝った時、46年のオリンピック予選の三つは印象深い」

オリンピック予選の時は重責に押しつぶされそうになり、苦しみぬいた。彼のナーバスな一面を物語っている。

☆キノの名は国際的にも高い。特にそのインサイドワークは、切れ味の鋭いフットワークとともに定評がある。

「まったく彼は考えたプレーをする」と最近来日したヨーロッパの名手・フランドセン（デンマーク、スタジオンIF）も驚嘆したし、昨秋のスノイ・ユーゴ監督も同じことを云っていたものだ。

☆最近、不満があるという。主に報道関係者が、彼への枕詞として「ベテラン」といったり「老巧」といったりすることだ。一日でも長く全日本に居るため限界に挑みこれまで以上の節制をつづけている時に、ハタで老けこまされてはかなわないと若い顔をふくらませた。「ベテラン」を「熟練者」と訳せば君にピッタリじゃないか―。

☆公式国際試合における初得点は中国戦の前半3分30秒の7MT。当時立教大学3年生。以来7年半177ゴール。

家庭には好子夫人と長女・陽子ちゃん。

### 木野選手50試合のあと

| | 試合日 | 対戦国 | 得点 |
|---|---|---|---|
| ① | 昭41. 10. 3 | 中国 | 6 |
| ② | 42. 1. 3 | ルーマニア | 1 |
| ③ | 42. 1. 8 | フィンランド | 8 |
| ④ | 42. 1. 12 | ✻ハンガリー | 6 |
| ⑤ | 42. 1. 13 | ✻西ドイツ | 8 |
| ⑥ | 42. 1. 15 | ✻ノルウェー | 9 |
| ⑦ | 42. 1. 25 | スペイン | 5 |
| ⑧ | 44. 6. 20 | ハンガリー | 7 |
| ⑨ | 44. 6. 21 | ハンガリー | 4 |
| ⑩ | 44. 6. 27 | ソビエト | 1 |
| ⑪ | 44. 6. 28 | ユーゴ | 4 |
| ⑫ | 44. 6. 29 | ルーマニア | 1 |
| ⑬ | 44. 7. 2 | ハンガリー | 4 |
| ⑭ | 44. 7. 9 | 西ドイツ | 5 |
| ⑮ | 45. 2. 26 | ✻チェコ | 2 |
| ⑯ | 45. 2. 28 | ✻ユーゴ | 4 |
| ⑰ | 45. 3. 1 | ✻アメリカ | 2 |
| ⑱ | 45. 3. 3 | ✻アイスランド | 6 |
| ⑲ | 45. 3. 4 | ✻フランス | 4 |
| ⑳ | 45. 3. 10 | ✻ソビエト | 2 |
| ㉑ | 45. 3. 10 | オランダ | 4 |
| ㉒ | 45. 3. 12 | オランダ | 5 |
| ㉓ | 45. 3. 14 | イタリア | 3 |
| ㉔ | 45. 3. 16 | イスラエル | 3 |
| ㉕ | 45. 3. 18 | イスラエル | 6 |
| ㉖ | 46. 9. 4 | スウェーデン | 4 |
| ㉗ | 46. 9. 5 | スウェーデン | 2 |
| ㉘ | 46. 9. 11 | スウェーデン | 4 |
| ㉙ | 46. 9. 18 | スウェーデン | 1 |
| ㉚ | 46. 11. 14 | イスラエル | 2 |
| ㉛ | 46. 11. 20 | 韓国 | 4 |
| ㉜ | 46. 11. 23 | イスラエル | 3 |
| ㉝ | 46. 11. 28 | 韓国 | 6 |
| ㉞ | 47. 8. 26 | アイスランド | 3 |
| ㉟ | 47. 8. 30 | ◎ユーゴ | 3 |
| ㊱ | 47. 9. 1 | ◎ハンガリー | 3 |
| ㊲ | 47. 9. 3 | ◎アメリカ | 2 |
| ㊳ | 47. 9. 7 | ◎ノルウェー | 1 |
| ㊴ | 47. 9. 9 | ◎アイスランド | 3 |
| ㊵ | 48. 9. 1 | ユーゴ | 3 |
| ㊶ | 48. 9. 9 | ユーゴ | 1 |
| ㊷ | 49. 2. 14 | イスラエル | 0 |
| ㊸ | 49. 2. 17 | イスラエル | 7 |
| ㊹ | 49. 2. 21 | ユーゴ | 3 |
| ㊺ | 49. 2. 24 | ユーゴ | 3 |
| ㊻ | 49. 2. 28 | ✻東ドイツ | 2 |
| ㊼ | 49. 3. 1 | ✻ソビエト | 0 |
| ㊽ | 49. 3. 5 | ✻ブルガリア | 3 |
| ㊾ | 49. 3. 7 | ✻西ドイツ | 0 |
| ㊿ | 昭49. 3. 9 | ✻スウェーデン | 4 |

・✻印は世界選手権
・◎印はオリンピック

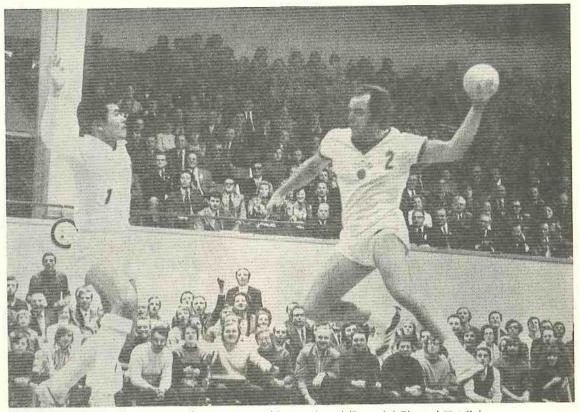
光島磯雄誌上展

# 第8回世界男子選手権作品集

↑迫力満点・藤中の豪快なジャンプショット（ブルガリア戦）

←木野の技巧的なプレーは相変らず光る。（東ドイツ戦）

↑ゴール前一瞬の攻防⑨は柳川弟，GKはドッグス（西ドイツ戦）

←この大会で佐藤（得人得点2位）の活躍はみごとなものがあった（ブルガリア戦）

↑現代最高のアタッカーと云われる左腕ガンショフ（東ドイツ）の攻撃に一歩も引かぬ本田の斗志

↑日本の課題はディフェンス、体力のある相手にのしかかられて射たれるケースが多い。⑩はマショリン（対ソビエト戦）

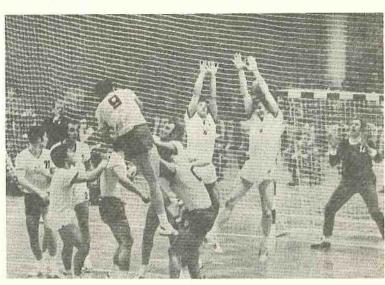
↓最近のヨーロッパ勢は長身のロングショーターばかりではなく，突進力のある選手が守備網に強引に攻めこんでくる戦法が目立つ。⑥ラケンマッハ（東ドイツ戦）

←5位をかけたチェコ対ソビエト戦。前半ソビエトの攻撃に、チェコのディフェンスはかきまわされてしまった。

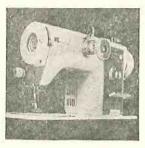
↑決勝の後半，ルーマニアは⑩コスマが貴重な勝ちこし点をあげた（GKは東ドイツのヴェイス）

→決勝戦、ルーマニアの守備陣は東ドイツ、ガンショフ②を巧みに封じ1点におさえた。これは勝因の一つである。

→決勝戦・ルーマニア×東ドイツ。ゴール前のせりあい。すべての選手の表情に優勝への執念をよみとることができる。

→決勝戦。佐藤と得点王を争ったルーマニアのエース⑨ビルトランの攻撃

↑ルーマニアの至宝GKペヌの軽快なキーピング

↓東ドイツディフェンスは，ルーマニアのゲームメーカーガツ（右端）を徹底的にマークする策戦をとったのだが一

↓2連勝を決めたルーマニアは優勝トロフィーをかかげて歓喜の場内一周

■ジューキミシンは精密工学の結晶とうたわれる高級品。シャープなスタイリングで、その名を高めています。

**世界選手権リポート**

# ゲームスタミナに課題残す

## ～予選リーグ・対東ドイツ～

柳川　清

世界選手権の第一戦は、優勝候補一番手の東ドイツとであった。前回は、惜しくも決勝戦でルーマニアに延長戦の末、一点差で敗れている。その為か今回の東ドイツは試合前の練習でも気合十分で、日本を圧倒しそうな意気込みである。東ドイツは、二人の左腕が攻撃の中心で特にガンショフはポストプレー、ロングシュートと多彩な攻撃を誇る最高のアタッカー。前半20分まで7対5で東ドイツが一歩リード、20分すぎに日本は7対7と同点とし逆転のチャンスもあったが、速攻からのノーマークシュートを失敗し逸した。一方、東ドイツは、日本のミスを逆にチャンスに結び付けて、あっという間に我々は13対9と点差を付けられてしまった。逆転のチャンスにおかしたシュートミスが悔まれる結果になった。後半に入ると東ドイツは、ガンショフの打つロングシュートが悉く決まり、日本のディフェンスは呆気に取られるばかりだった。キーパーの顔の横や身体の側を貫くシュートは物凄いスピードがあり、キーパーが手も足も出ないような感じである。このガンショフをマークしているとポストシューターの素早い動き、ピボットプレーなどで日本のディフェンスは攪乱され、ゆさぶられてしまった。日本は後半、スタミナ不足でボールの回りが遅く、個人技で勝負したような結果になった。日本は前半にスタミナを使い果した感じで、一試合フルにスタミナが持つような体力をつけることと、ディフェンスにおいて体力的に劣っているので素早い動きでカバーするようにしなければならないと痛感した。特に日本が世界の上位に入るには、これまで何回となく言われて来たことだが、ディフェンスの強化を行うことが先決だ。スタミナについては、欧州ではオフェンスとディフェンスとで選手を使いわけ、選手交替を頻繁に行なって、この面をカバーしており、そういう作戦もこの課題を解決する一手段ではないかと思う。日本は一試合を通して、同じ選手がオフェンス、ディフェンスを行なっているため、ディフェンスで力を使い果して、オフェンスになると力が出ずミスが多くなり点に結び付かなくなって来るのだ。

日本は攻撃力においては、世界のどのチームに対しても通用することを実証した。これは殆んどの試合で二十点以上取っていることでも判る。日本人の特徴を活がした素早い動き、速い攻めなどが今回も有効であった。ディフェンスをより強化することと、欧州との交流をさかんにし、数多くの国際試合を経験して少しずつ上位諸国との差を縮めることが、結局は世界の壁を破る一番近道ではないかと思う。

（FP、大同製鋼）

### スポーツ王国・東ドイツ

東ドイツは今や世界最高のスポーツ王国と云える。

「1日1回はスポーツを」というスローガンが徹底し、スポーツ奨励を憲法でうたっているのだ。

公営の体育施設は市内のもっとも便利な場所にあり、クラブ組織もしっかりしている。

世界選手権は国内11市町村に散って行われたが、どこの会場も、夏目選手が報告(27頁)しているように、けっして大きいものではなく、収容力は予選A組と準決勝2組の主会場となったカールマックススタットの四千七百が最高、首都東ベルリンも通常は三千七百人が限度ということで、使い易さに主眼がおかれているのはさすがであった。

**全日本遠征成績**

▽第8回世界選手権（東ドイツ）

・予選リーグC組

| チーム | 得点 | 前半 | 後半 | 得点 | チーム |
|---|---|---|---|---|---|
| 東ドイツ | 31 | 13—9 | 18—7 | 16 | 日本 |
| ソビエト | 25 | 13—7 | 12—11 | 18 | 日本 |
| 日本 | 29 | 13—9 | 16—9 | 18 | アメリカ |

・9～12位決定戦

| チーム | 得点 | 前半 | 後半 | 得点 | チーム |
|---|---|---|---|---|---|
| ブルガリア | 23 | 13—12 | 10—10 | 22 | 日本 |
| 西ドイツ | 30 | 15—12 | 15—12 | 24 | 日本 |
| スウェーデン | 28 | 14—11 | 14—10 | 21 | 日本 |

日本＝12位

▽第8回世界選手権アジア予選（イスラエル）

| チーム | 得点 | 前半 | 後半 | 得点 | チーム |
|---|---|---|---|---|---|
| ①日本 | 14 | 6—6 | 8—8 | 14 | イスラエル |
| ②日本 | 18 | 10—7 | 8—7 | 14 | イスラエル |

▽親善試合（※印は公式国際試合）

| チーム | 得点 | 前半 | 後半 | 得点 | チーム |
|---|---|---|---|---|---|
| ※ユーゴ | 36 | 15—8 | 21—16 | 24 | 日本 |
| ※ユーゴ | 27 | 12—10 | 15—7 | 17 | 日本 |
| 日本 | 15 | 8—9 | 7—6 | 15 | ベルリンSV92 |

通算11戦2勝2分7敗

## 日本、シュート最多記録

西ドイツの「週刊ハンドボール」誌によると、今回もっともシュート（6試合通算）を射った国は日本で275本、シュート成功率は47％。

最少はルーマニアの210本、シュート成功率は52％。シュート成功率の最高はソビエトの59％。なお失点のもっとも多かったのも日本（155点）で、ルーマニア（81点）と74点も差がある。

## 〝フェアプレー〟は東ドイツ

### 最下位にルーマニア

大会終了後、組織委員会はフェアプレーカップの受賞国として東ドイツを決めた。

同賞は6試合を行った12ケ国を対象に反則退場1分につき減点1警告1回が減点1、課せられた7MT1回で減点2とし、減点合計数がもっとも少い国を選びだしたもの。東ドイツは減点54（反則退場12分、警告8回、7MT17本）日本は減点80（反則退場14分、警告6回、7MT30本）で5位、12位はなんと優勝したルーマニアで減点115（反則退場52分、警告11回7MT26本）。

7MTをもっとも課せられたのは西ドイツで41本。

## 190cm以上が54選手

各国の大型化はいぜん天井知らずの感じ。190cm以上の選手は4年前の第7回大会では43人だったが今回は54人に増え、このうち195cm以上が13人もいる。

最高は、カーレルト（東ドイツ23才）の2m。

一方、小がらな選手は日本というのが通り相場だったが、今回はアラドスチョフ（ブルガリア、21才）の169cmが記録、ちなみに彼は31ゴールをあげて個人得点3位に入る頑張りをみせた。

## 不安なかったアジア予選

藤中　憲二

二月八日、午前五時十分にテルアビブに到着。一日がかりでやっとアジア予選開催地のイスラエルに着いた。飛行場では、日本選手団を待ちかねていたのか、テレビ局や報道人等の姿が見え、インタビューを受けた。私は以前イスラエルを訪れた事があるが、今回のように空港で報道人の出迎えを受けるのは初めてである。今度のアジア予選にイスラエル側がかなりの力を入れている事を感じるに充分だった。ホテルは前回と同じく「ラマタビブホテル」。周囲が緑に包まれ、バンガロウ風の建物で非常に気持がよかった。我々は試合を六日後に控え、早速タクシーで二十分くらいかかる練習会場へと向かった。運転手の話によると、我々の事をよく知っており、一度は日本チームが来ないと言った事に対して、イスラエル国民に大きなショックを与えた様だが、到着した現在ある種の安心感を抱かせたと思われた。なぜならば、イスラエルは今、戦争中でありこうした時に国際親善が行なわれる事は国民にとってなごやかなうるおいをもたらす事だからである。町の中を歩いていると、「シャロン」と笑顔で挨拶をしてくれた遠くにいて声の聞こえない時にでも手を振って答えてくれる。我々が非常に歓迎されている事がわかった。このように異国に居て、誰からでも喜こばれる事は私達にとって非常に心強く感じるものだ。

二月十四日、アジア予選の第一戦が行なわれた。この日はテレビ放送されるのにもかかわらず、八千人の観衆を集めての試合であった。私は、今日まで国際試合をかなり経験してきたが今度の試合のように観衆が熱狂的に、自国を応援している試合をしたのは初めてである。試合中は、我々選手同志の声も聞こえない程で、フォーメーションを声に出してやっていたが徹底せず失敗した事もあった。例えば、私が七メートルスローをうった時、笛が聞こえず審判が私に早くシュートしろと手招きした程であった。八千人の人々全員による歓声がどれ程か書くすべもない。

二月十七日に第二試合が行なわれた。この日はテレビ放送予定にはなっていなかったが第1戦の中継が好評で急きょ特別放送が編成されたという。この影響もあってかファンの数は約五千人程と思われ、第一試合と比較すれば、やや少なめではあるが相変わらずの応援であった。熱狂的な観衆にもなれておちついた判断と行動がこの夜はできこれにより良い結果をもたらす事ができたと言っても過言ではない。

私達はイスラエル国民に歓迎され、いたる所で「シャロン」と挨拶され、現在戦争中とはとても信じられなかった。何一つとして、不安や不満はなかった。今後、もう一度イスラエルに行く機会があれば、「シャロン」と言って、挨拶を交したい。（主将・FP、大同製鋼）

## 世界選手権リポート

# 余裕をもっての快勝
## ～予選リーグ、対アメリカ～

佐藤　要二

東ドイツとソビエトとの2試合を終り、日本の目標であった、ベスト8・準決勝リーグ進出を達成出来ず、次の段階ともいえる9位から12位決定戦への出場をかけてアメリカと対戦したのは3月3日だった。

外国チームは、日本に対しては日本をはるかにしのぐ身長差、体重差を活かしてパワーハンドボールに徹するのが最善と心得ているようで外人特有のロングシュート1人2人を引きつけての高いジャンプパス、ディフェンスにつかまれているのにひきずり込む様なポストシュート、サイドギリギリからのシュートで攻めこんできた。

こうした攻撃を防ぎ切るにははげしいディフェンスしかない。速い動きをつづければアメリカ戦には絶対に勝てる、高いシューターに対しての、早い詰め、一試合通じての声の連絡、早い戻りを励行することを申し合せて試合に臨んだ。

アメリカは、バスケットボールの選手を補強、黒人選手も加えヨーロッパからコーチを招いて強化したようだがチームプレーも、個人技も何となくバスケットボールに近い。カットインフェイントを多用し、滞空時間の長いシュートパス、そしてスカイプレーなどを使い、アブラハムソン、バークホルツ、ロジャース、ネイラーなどが中心であった。

日本は、開始早々3点を連取するなどして緊張がほぐれ、巧くすべりだせた。

余裕をもった我々は、その後も速攻、ロング、サイド、そして初めて高い相手守備陣のカベを破ってのポストへのパスなど、多彩の攻撃展開が出来たが、ディフェンスでは、体の大きいアメリカ選手の、パスプレーに身体がついていかず、長い間、ボールを持たれると、わかっているはずのポストへのパスや単独で強引に割り込んでくるシュートなどで得点を許すケースが多かった。

後半に入っても日本の攻撃はスピードが落ちず速攻、ポスト、ロングなどで加点し、アメリカの退場者などもあり、ペース配分もうまく取れ、確実に点差を開く事が出来た。

これで、日本は9～12位決定戦へ居残れたわけだが、予選リーグを終って感じるのは、日本が桧舞台で健斗するためにディフェンのコンビネーションを強固なものにすることと、どのようなポジションからでも攻撃展開ができる力を養うことが絶対条件である。

そのためには、短期間の合宿ではムリだ。チームメートの気心がわかるだけでも、かなりの日数が必要であり、この点を充分に考慮し、数多くの練習、合宿を経て最高のムードで大会を迎えることができるようにされなければいけないだろう（FP、本田技研鈴鹿）

# 若さのぞきペース誤まる
## ～9～12位戦、対ブルガリア～

中井　武三

またしてもベストエイトの壁は厚く、我々ナショナルチームの前に立ちふさがれてしまい九位～一二位決定戦にまわってしまった。

第一戦はブルガリア。しかし、ブルガリアについての資料、情報が乏しく、いまさらながら日本のおかれている立場、島国の悲しさを味わった。わずかに、サイドシューターに左利きのすばらしい選手がいる、ポストプレーが多い、ということぐらいしか情報が入ってこなかった。そこへいくとブルガリアには日本の適確な情報が流れていて、それなりの対策を企てて試合に望んできた。

ブルガリアの攻撃は、今まで予選で戦ってきたチームと異なり、ロングシュート及びローリングオフェンスがなく、個人プレーが多い。攻撃パターンは、フェイントからのポストマンへのパスとサイドシュートへのパスそして、強引な割込みだ。ポストシュートは他チームにくらべてあまりうまくはなく、なんとか守ることができたが、サイドシューター（左利き）に八点を奪われ、また強引な割込みをゆるしてしまい無理な守りから7MTをとられてしまったのは失敗だった。

ディフェンスは、日本の動きについていけるように一線防禦を布き、ロングを射たせて取るという作戦をみせた。

予選で強チームの一線防禦と戦ってきた我々は、体格が日本人とあまり変わらないブルガリアの一線防禦は射ちやすいと感じ、予選でのすばやい動き、連系プレーからのシュートをわすれ、単発シュートを射ってしまった。

そのため自らのペースを乱し、速攻をかけても凡ミスがでて、バックの連けいも悪くその結果、後半なかばでの三点差を守りきれずに、最後の土壇場、三〇秒前に逆転されるという最悪の事態で終わってしまった。

敗因はいろいろあったがまだチーム結成以来一〇試合たらずしかやっていないため、試合経験の浅さからくる勝負どころでの見極めができず、むやみやたらに攻撃をしかけ、相手のリズムに合わした試合を行なったために最後のつめが甘く、たくみにつけこまれてしまったことが大きい。

今回も全国の皆さんのご期待にそうことができなかったが、若い全日本にとっては、異国での試合がいかにむずかしいか、又、ブルガリア戦での教訓等、身をもって体験できたことは、かならずやこれからの試合に役立つものと思う。又、ヨーロッパ強国と対等に戦えるということを、チーム全員が感じたことは、大収穫であったと思っている（FP、大同製鋼）

# 印象的な長身のテクニシャン

## 〜9〜12位戦、対西ドイツ〜

蒲生　晴明

三月七日、薄曇りのマグデブルグ体育館で西ドイツと対戦。前日、シュベリンからバスでえんえん四時間かかってやっと当地に到着しました。

マグデブルグ半球で有名な場所で東ドイツでもベルリン、ライプチヒと並んでもっともハンドボールの盛んな土地の一つと云われます。一昨日は、ブルガリアに一点差で敗れ非常に残念でした。今日はそのうっぷんを吹き飛ばそうと全員はりきって試合に臨みましたけれども、結果は6点差で敗れ念願の9位入賞をあきらめねばなりませんでした。

西ドイツは、日本と同様ベテラン選手が退き若手の多い陣容でした。しかし、日本でおなじみのシュミット、カーター（グンメルスバッハ）らは健在で、相変らず好プレーを見せていました。

この試合は、日本チームの課題であるディフェンスの勝負でした今までの試合でもディフェンスさえ良ければ勝利を握れた試合はあったと思えるのですがもう一つ粘り切れずに敗れてきました。前半から、両チームとも点数の入れ合い、一点を争う間に、西ドイツが長身者のロング、ポスト、サイドと決め、前半3点差、後半日本はポストディフェンスを目的にプレーしましたが、今度は上からふられ、強引にシュートされるケースが多く、またしてもディフェンスの弱さを身にしみて感じさせられた一戦でした。

日本は24点を取りながらディフェンスの面でのマイナスが非常に大きく尾を引き勝利にはつながりませんでした。

攻撃面では日本はサイド、ポストは少なかったがミドルが多く決まり攻撃のリズムは良かったように思います。西ドイツはシュミットを中心に、190cmを越す者がよいタイミングでロング打っていたと思います。特にグンメルスバッハの新鋭・デッカルムは、欧州のハンドボール選手では珍しく、やせ型で、体重は84kg（193cm）。しかし体の使い方が非常にうまく、シュートを打つ時の空中バランスが『むち』の様にしなり、タイミングは一歩遅れるが、最後の瞬間にスナップがききスピードのあるシュートを打っていました。けっして力まかせにシュートしている感じではなく、リズミカルにボールを取り、ステップジャンプまでが非常に速かったのが印象的で、ヨーロッパにはこうした「長身のテクニシャン」がいることを知らされました。

（FP、中大）

# 崩されたディフェンス

## 〜9〜12位戦、対スウェーデン〜

柳川　実

世界選手権の最終戦。朝七時に起きて、練習着に着がえ、荷物もまとめた。朝が早かったため、食欲があまりなかった。今日の試合は、初めて午前中である。

試合場に向かうバスの中では、ほとんど寝ていた。およそ1時間ほどでデソーに到着、試合会場は町工場みたいな所の体育館であった。体育館にはいると、早朝にもかかわらず観衆がつめかけていた。コートサイドで、コーラや、お菓子を売っている。日本では考えられないことだ。体育館はそんなに大きくなく、日本の高等学校にあるくらいの大きさであった。我々はミーティングルームで個々にトレーニングのあと、北川監督より今日の試合はオフェンスは、ダブルポストを採り、一・五ディフェンスで守るように伝えられた。試合は、日本のスローオフで始まった。

ダブルポストでボールを廻すがスウェーデンは、サイドに対し、マンツーマンをとってきたためボールが大きく回らず、足もあまり動かず単発にシュートを打つことが多かった。スウェーデンはスピードはそんなにないのだが、日本のディフェンスは、ついていくのが精一杯で、サイドからフリーで打たれたり、ポストに入れられ体でもっていかれて7MTを取られたり、ワンフェイントから、半身抜かれて、シュートされ、ゴールキーパーとの連係も、うまくいかず、点差を開かれた。

後半も同じような展開で、日本はフォーメーションなど使って攻撃したが、シュートがバーに当ったり、シュートミス、パスミスなどあり、逆に、スウェーデンに、速攻をかけられ、余裕をあたえてしまった。日本も、終盤になって速攻が出たが、一気に逆転することはできなかった。

最終戦だけに絶対勝ちたい気持だったが、選手一同、今一つ気迫が足りなかったように感じ、特に9〜12位決定戦の第1戦であるブルガリアとのせりあいに敗れたことの精神的なショックがこの日も多分にひびいた感じだ。

世界選手権全体をふり返ると日本は攻撃、オフェンスの力、シュート力、ボール回しの時のスピード、個人の持っているフェイントなど、外国でもじゅうぶん通用するように、僕は感じたが、しかし日本の弱点といわれるディフェンスは今回も残念ながら認めざるを得ない。今日の試合にしても、スウェーデンは、スピードでは我々日本よりはるかに劣るのだが、それに足がついていかなかったし、ポストにボールを入れられると、体で押し込まれ7MTを取られたり、シュートされたりする。つくづく体力の差を感じた。

外国、それもヨーロッパチームの体力に打ち勝つためには、腕の力を付け、脚力、そして、一時間動いても疲れない肉体的スタミナ精神的スタミナが必要だし、チームワークも欠かせないと考える。今後、この大きな問題に取り組み日本の、早いスピードのあるハンドボールを世界で通用するよう頑張るつもりです。

なお、9〜12位決定リーグに西ドイツ、スウェーデンが落ちてくるとは思わず、改めて共産圏―東欧勢の強さを思いしらされました

（FP、大同製鋼）

# スピード豊かな決勝戦

## ルーマニア対東ドイツ

木野　実

今大会の決勝戦は三月十日ルーマニアと東独の間で東ベルリンスポーツホールで行われた。東独は予選Dグループでソ連と引分け、準決勝ではオリンピック優勝チームユーゴに辛じて勝つなど決勝までの道のりは決してやさしいものでなかった。ルーマニアは予選リーグでスウェデンに負けはしたもののこれは体調を考えての負けで断然他を圧倒しての進出、グルイアが引退したあと、どの様なチームに変身したか楽しみだった。しかしこれ程の力で決勝にでてくるとは想像もしていなかったしましてやグルイア以上?のビルトラン(ステアウアブカレスト・1m94 97K)がでてこようとは…。彼のプレーをみた時つくづくルーマニアの選手層の厚さを思い知らされた。パス、動きはぎこちないが素直なシュートはよくコントロールされ確率はグルイア以上。又、チームのバランスもオリンピックの時よりまとまりがある様に感じた。東独は地元だけに有利な面があったものの選手の表情は硬くいま一つ切れ味がなかった。みていてもやっと得点したやっと守ったという感じで余裕が感じられなかった。ゲーム前から観衆のうるさいこと、いやがうえにも場内は熱気でムンムン。見ているだけの自分も紅潮してくるがよくわかる。東独の攻撃のたびに大きな手拍子で観衆とコートがいったいになり声援、ハンドボールをよく知っているし自分達もハンドボールを心から楽しんでいる様子だ。その手拍子の見事なこと。日本の場合はおとなしすぎるし声援もバ声になってしまう。先手ですすんだルーマニアだったが24分5分間の退場者がでて終了間ぎわ速攻にあって逆にリードを許し前半8−7で終る。ルーマニア7点のうちビルトランが実に5得点、これもロングシュートばかりのもの、全く素晴しい。リードした東独に後半ミスがでてそこをルーマニアにつかれ逆転される。このまま終ってしまうかにみえたがまたしてもルーマニアに5分間の退場者がでて大ピンチを招いた。ムードも最高、攻防の激しさも殺気だって恐ろしい程。しかし完全なノーマークシュートを二本、GKペヌが好捕、闘志のあるプレーは後半とくに光っていてルーマニアを救った。いつも頭にくるペヌがこのゲームでは冷静でミスがなかったことはビルトランと並んで優勝の原動力であった。ルーマニアのディフェンスは前後半5分間の退場者をだしながら最少限にくいとめた気力、激しさ、強さは実にすばらしかった。フットワークの早さは他のチームと問題ならなかった。ディフェンスオフェンスの専門選手の交代の素早さ、巧みさは我々がちょっとまね出来ないものである。コーチのネデフ氏のインサイドワークもみのがしてはならないものだと思う。時間と得点を考えたルーマニアのベンチ、それによく精通し、しっかりベンチの指示、作戦を見事にやってのけた選手、ボールをとられてもすぐとりかえす気力、気迫、本当によく訓練してある。そんなところにルーマニアの激しさ、厳しさがある様に感じた後半終了前大事な時にルーマニアサイドに7名のFPが入って攻防興奮と熱狂で計時員、記録係も見落とすほど。結局判定はフリースロー、ルーマニアにはラッキーなことだった。それにしても最後まで力の入った一戦で終了の時は何か力が抜け疲れがどっとでてくる様だった。攻防もスピーディで醍醐味レフリーのジャッジも観衆の声、ゲームの緊張感、流れにまどわされることなく大役を果たされた。終了後ルーマニアの国旗をかかげて場内をかけまわる選手達の誇らしげな顔には本当にいままでやってきたことが報われたという喜びが溢れ実にすがすがしく目に映った。(コーチ兼FP、湧永薬品)＝写真はルーマニアのマークをかわして鋭い攻撃を見せる東独のガンショフ。光島磯雄氏提供

## 世界選手権リポート

# 急げ、日本独自の防禦技術

本田　洋

日本をはじめ各国ともミュンヘンオリンピックよりもディフェンス力が増しているにもかかわらず相手45度のロングシューターに多くのポイントを奪われていた。これはフリースロー2m後の位置でジャンプされそれに対してディフェンスがボディチェックあるいは2人。3人でシュートコースを阻止しようと動くスキをかわされたあと、横の位置へ移られて自由にシュート出来る態勢をとられたためである。ゴールインするロングシュートはほとんどといってよいほどこのシュートであった。

マンツーマンに対する攻撃者の個人技も素晴しくなっている。押さば押せでくるディフェンスをフットワーク、ボディワーク、ハンドリングで振り切りながらシュートチャンスをものにする。ミュンヘンオリンピック時に較べて、一対一でのオフェンスの優位さが増していたと云えよう。

今回、ヨーロッパ各国のディフェンスはボールに対して全員が激しく動き、45度のシューターに対し、2人、3人のフォローの壁で守ろうとする傾向を一段と強めていた。本来ディフェンスは、受動的である為、中央部でのアタックが強まればポスト、サイドへと攻撃側はノーマークのポイントを展開してゆくのは当然である。

日本の野田が生かしていたサイドシュートをヨーロッパなりに工夫し、体格、ジャンプ力の優れたシャープな選手が、サイドから内側に飛び込む。右サイドから右ききの者、左サイドから左ききの者がダイビングしてくるのだ。

ヨーロッパと云えば中央部からのロング攻撃という定型を考えていてはもう古い。

サイド攻撃とGKの対峙、これは今や〝宿命的〟なものになった感じである。

ミュンヘンでは、GKはサイドシュートに対して前に詰めシュートコースをつぶしているのが多かったが、今回は、オフェンス側はGKのとる位置をかわし、内側へそして高い位置にボールをもってきている。GKがシューターの位置を読んで、前、空間（ジャンプカット）キャッチしようとするとこれまでどおりの浮かすシュートはもちろん股下、脇横へとアンダスロー、サイドスローなどで射ち分けてくる。また、身体をひねり近目の上を狙ってくるのも多い。

日本との試合では日本のサイド守備者側に利き腕を入れて内側へ飛びこんでくるため、サイド守備者が突いたり、引っかけたりすると7MTになり、又、少々押されてもボディワークとハンドリングでブロック(阻止)し、ゴールへ持ちこまれてしまうケースが多い。

サイドシュートの多用が、今回の世界選手権で目についたヨーロッパのもっともいちぢるしい〝新方向〟であった。

ところで、世界を征するものは優位に立つオフェンスを抑えるディフェンス力である。ミュンヘンオリンピックでユーゴは「1、2 3ディフェンス」を中心とした戦術的、変則的なディフェンスシフトの技をしき、ディフェンスの個人技とチームの技を生かすことに成功した。今大会でのルーマニアは一対一を守り貫くディフェンス専門の選手を中心に一線(0—6) 1・5、2・4、1・2・3、5・1と臨機応変の切り替えで守り抜いた。そのディフェンスの激しい動きは時には、荒い動きと見られ、退場者が多く、全試合6ゲームで通算52分間の退場最多記録となったが、5人で堂々と守り抜くことが多かった。（編集部注・最少退場通算分数はスウェーデンの10分、日本は14分で3位）

ところで日本のオフェンスは世界のベスト8入り出来るが、ディフェンスは出来ていない。もちろんGKもである。ヨーロッパの防禦技術と日本の求めている防禦技術とはレベルが同じである点が悪い彼らと比較すると、かならず生まれてくる体格、体力差で「負け」になる。いつの時代にも体格が劣るであろう日本が同じことをしていたのでは、いつも負けることになる。一刻も早く、自分達で日本独自のヨーロッパ（体格、体力のある相手）に先手を取った防禦技術を創るしかないのである。

（GK、大阪イーグルス）

# 初めて本場に遠征して

花輪　博

外国遠征――不安、期待、うれしさのそれは交錯です。

しかし、ただまん然と外国へ旅立つわけではなく、アジア予選を勝ち抜いて、東ドイツの本大会へ出場する目的があったのですから責任感も私の胸の中にずっしりと占めていました。

それでも、自分は自分なりの目的、といえばオーバーかもしれませんが、心に決めたいくつかのものをもって旅立ちました。

とりわけ、自分の力がどの程度外国ナショナルに通じるのか、自分と対戦したチーム、プレイヤーはどのようなプレーを見せるのかそして外国同志のゲームとはどのような〝内容〟なのか、という3点は、私の今回の遠征のもっとも大きな目的だったのです。

外国に於ける初戦で、私は初めて話に聞くブーイング（Booing観客が選手の凡失や、納得のできない判定に対して抗議するため口々に「ブー」「ブー」とやじるもの。国際試合では相手選手のプレーをこれで〝威かく〟することも多い＝編集部注）を経験しました。イスラエルとの第1戦で、監督の指示をうけ7MTを打ちに出た時のことです。あとでこの日の観衆は八千人と聞きましたが一人一人のブーイングが自分の肩にどっしりとのしかかってくるのが七メートルラインについた時はっきり感じられました。審判の吹く笛も聞えず審判の顔を見てから七メートルを打ちましたがキーパーの足にすい込まれ味方の期待にそえませんでした。日本でも相手側の応援に騒がれる経験はありましたが、イラエルとの試合のように観

来すべてがあらゆる意味での応援をしているケースに出会うのは初めての経験でした。

この時、私はいかなる場合においても自分の力を十分に発揮し、それをより長く持続しなければならないと感じ、これは今回、私がナショナルプレイヤーとして外国遠征に参加して一番大きな収獲のような気がしました。そしてこの経験は本大会で大きなプラスになったような気がします。

今まで海外遠征をされた先輩から少なからず外国チームの事を聞き、また、自分のイメージにも外国チームはロングシュートがすばらしく、また、力強い印象がありましたが今回はそれにも増してすばらしかったのは外国選手のサイドシュートでした。自分の身体をうまく生かし、そしてディフェンスを利用してシュートしているように思えました。

外国チームのディフェンスはほとんど一線防御で激しい当り、速いピストンで日本では見られない激しさですが、そこのディフェンスに対してロンシュートを打つチャンスが少なくなっているため半身半身とフェイントでかわしサイドにながれ二対一をつくり、サイドで勝負する型が多くなりつつあるような気がします。サイドで二対一になった場合ほとんどが七メートルかゴールイン(失点)になってしまいます。時にサイドはフォローディフェンスがないのでそのケースが多いようです。

サイドディフェンスはシューターの正面に素速く入ることが欠かせず、特に外人相手にはそれを痛切に感じました。これはサイドだけではありませんが、サイドはとなりのディフェンスのフォローがあり、体格のよい外人にはこれは非常に困難な事ですがそれをしなければどうにもならない事です。正面に入っても、当たりにいってもシューターにのりかかられて当たりにいった本人がすっとばされる始末です。ただそれだけで終わってしまえばどうということはないのですが、いかに相手からチャージをとるかという事が課題になると思います。それは前にも述べましたようにシューターの正面に素速く入ることが鉄則だと思います。となりのディフェンスのフォローをして素速くライン内に入らずシューターの正面に入ることは大変なことですが、なにしろこれをやらなければ7MTかゴールイン(失点)のどちらかです。

最後に、外国のナショナルプレイヤーについて記したいと思います。

一言でいうなら、彼らは一人一人が〝個性をもったプレイヤー〟であるということです。

さらに、自分のポジションは誰にも渡さないぞ、という気迫にあふれていたことも強い印象を受けました。それは、このポジションは、自分だけにしかできないのだという自信と斗志でもあるのです どの選手も、激しい競争に勝ってナショナルプレイヤーの栄光をつかんだのであり、心・技・体三拍子のうち、一つでも欠けていたらその座を得ることができないのです。

そうした選手たちの集りであるナショナルチームが、すさまじいばかりの気迫をともなったプレーで60分間を終始するのは当然であり、私にとってこれは大きな感銘となって残りました。(FP、大同製鋼)

# 多かった7MTと「退場」

夏目真治

私は競技をはなれ、世界選手権の運営などについて感じたことを書いてみたい。

**【運営面】** 我々は、首都ベルリンの主会場で予選リーグがあったため、盛大な開会式に参列できた。入場行進で始まり、会長挨拶、国歌演奏などがあり、初出場の私は非常に感激した。

館内は各国のテレビ局が来ており、ヨーロッパ中に中継放送していた。

セレモニーや試合時間なども、プログラム通りに進み、又宿泊施設は、すべてこの国の通例で国営ホテル。日本はベルリンなど3都市で宿泊したが、どこも環境がよく部屋、食事も非常によかった。宿泊施設には、私服の警察官がいて護衛していた。練習場なども十分に使用することができて、会場の往復には、専用のバスでパトカーが先導、国家がこの大会を全面的にバックアップしていることがよく判った。

**【観衆】** ヨーロッパの人々の、ハンドボールに対する知識は、日本とは比べものにならない。観客層は、日本と違い、大人の方が多く熱狂的なファンも数多くいる。試合中は、拍手や歓声がすごく、時にはレフェリーの笛なども、聞えないときもしばしばあった。間違った判定をした時などは、口笛やバ声で批難し、またよいプレーがあった時は、拍手で賞讃していた。特に地元の東独が攻撃の場合観衆が一丸となって手拍子で応援し、相手チームが攻撃の時は、やじなどをとばしていた。このように、ヨーロッパでは、日本で考えられないほど観客は、熱狂し、興奮するのである

**【施設(体育館)】** 日本は4都市の体育館で試合を行なったが、どの体育館もすべて、暖房装置がありシャワールームなども完備されていた。体育館は日本と同じフロア(ウッド)であるが作りは良くなく、ハンドボールコートが一面とれるだけの広さで、観客の収容人数も、2千~4千ぐらいの小さな体育館が多かった。また間近でプレーが見えるように観客席は作られ、天井が低く、照明が大変明るくプレーしやすかった。体育館は日本と比べて小さいが設備は抜群で、日本もやたらに大きいばかりではなく、ゆきとどいた設備の体育館を数多く作るべきではないか

**【レフェリー】** 審判は競技運営の最高責任者として、厳格さと威厳を持ってレフェリングしていたことに感心させられた。しかし、中には二人のコンビが合ってなく、又感情的に笛を吹いていた審判もいたが、全体的に、自信とプライドを持って判定していた。特に7MTと退場者が多かったことが目につき、特にエリア内とサイドシューターに対するシュートカットは、7MTのケースが多く、またプッシングやホールディングは、即退場のケースもしばしば。日本では、フリースローのケースが、退場や7MTになってしまうことが多く、日本でももっと厳しくとるべきではないかと思った。

(FP、中京大—三重教員ク)

## 世界選手権リポート

# 東欧諸国の強さをこう見る

大江　隆夫

今回の世界選手権でも、ミュンヘン同様、東欧諸国のチームが、圧とう的強さで、上位7位独せんの好成績を上げ、世界ハンドボールの中心は東欧諸国である事を我々全日本選手の心の中に焼きつけたようであった。彼らの強さの根源と、どのような環境で現在に至っているかを、今回世界選手権での体験や各役員の話などを基に書き下して見たい。

思想的に見て、共産圏の国は、国家的意識が大変に強く、又ハンドボールなど行こなうスポーツ選手は、軍隊などの職業につき、職業と、スポーツが同一的なものであり、このような世界選手権での成績が、直に給料や自分自身の地位に、はね返って来る。その面で見るならば、彼らは一種の職業的なものがあり、自分の生活に勝ち負けが直接影響を受ける。このため勝負に対しての、勝つ事のしゅう念や、しゅう着心は恐ろしい程に強く、力強さ、はく力は、すばらしい。彼らのプレーの要所々々にこのような面が見られた。ダイビングシュートなどに対して、このような事は特に感じ取れ、ゴールに自分の体を入れても、ポイントを上げる、などすさまじいばかりのプレーをやってのける。又目の鋭さにおいても、まるで、ヒョウなどがえ物を追うような、輝きがある。このように書くと、彼らは、力強さだけで、プレーをしている感を受けるであろうが、技術的においても非常にすばらしく、ボールに対するテクニックや、要所々々の瞬間的動きはするどく、特にドリブルが、大変すばらしかった。体の動きとボールの動きが、ピッタリと言って良い程に密着し、手とボールの間がまるで磁石のNSの関係を持っているような、感じを受けた。どのチームにもこのような選手は数人いたが、特に印象に残ったのは、今回優勝したルーマニアのガッツであった。彼は完全なるボール廻しであり、チャンスメーカーである。日本人と比較した場合、体型的に見ても違いはなく、彼の方が、かえって、ひん弱さを受ける感じである。パスにしても、どんな状態であっても、絶好なパスをし、体全体に目をそなえているようでありハンドボールの魔術師的な選手である。全ての観客は彼のプレーに魅りょうされていた。このような選手が出て来るのは、一つにおいて、国家的に運動に力を入れ、スポーツ環境に恵まれて、底辺が広いからではないだろうか。幼児期において、常にボールを扱う遊びや、スポーツを行ない、この時期は非常に吸収力が強く、ボールに対しての感覚が発達し、将来ナショナルチームでプレーするのに、大切な時期だと思える。木にたとえるならば、根が大変深く、広く張っている。この基盤より、すばらしいプレーが生まれて来るのではないだろうか。東欧諸国では、国家的に見ても、たて横の命令系統が実にしっかりしており、ナショナルチームの一員だと、合宿になれば、どんな事があろうとも協力組織がガッチリしており、出る事が出来、常に豊富な合宿を行こない、生活もある程度安定しているので、自分の体力限界までナショナルの一員で活躍出来る。日本では考えられないような年齢でもナショナルに所属している。この事は、体力的違いもあるけど、環境の違いがある。真のアマチュアでプレーするならば、日本などではある年齢に達すると、生活の事を考え引退せざるを得ない。せっかく経験を積みこれからだと言う時にこのような事が起こって来る……。

今まで述べたように、東欧諸国の強さは、このような国家的思想の違いや、環境の違いより発しているものと思われた。

（FP、三菱レイヨン大竹）

# ユーゴスラビアでの親善試合

菊池　悟

イスラエルでのアジア予選に勝った我々は、世界選手権出場の切符を手にテルアビブをあとにしようとしたが空港ではトランクの中の全ての物を開封するという凄じいチェックを受けた。テルアビブからベオグラードに到着したのは2月19日の夕暮れ間近であった。

イスラエルの気候があまりにも穏やかであった為か、空港におり立つと同時に寒さを膚に感じた。空港から田園地帯を通りベオグラードのほぼ中央にある「スラビアホテル」に到着。東欧と称される社会主義国の中で、最も西側に近い国であろう。ベオグラードの街は、七千年以上の歴史を持つ古い街で、古い石畳の道と、よく整備された大きな街路樹とが調和して印象的であった。これがヨーロッパ的というのであろうか……。又、街のあちこちに日本では決して見られない大きな公園があり緑の豊富さも感じた。公園の中には数々の体育施設が整備されていた。ユーゴでのハンドボールへの関心度を見る際に、必ずといっていい程、グランドにはサッカーのゴールとハンドボールゴールとが併設してあけ、日本とは異った環境でハンドボールが普及しているようである。

世界選手権を一週間後に控えて、ユーゴでの親善試合は、国際試合経験の少ない選手の多い今のメンバーは、非常に大切に行なわれなければならない試合であり、チームとしても最後の調整を行なわなければならなかった。

第一戦は、ベオグラードのピオニール体育館で行なわれた。（この体育館は、女子の世界選手権の主会場であり優勝戦も行なわれた所である）。日本チームと同様に、ユーゴも世界選手権を控えての合宿中であり、昨年来日したチームのデータでこの試合に臨んだ。試合前、廊下ですれ違う我々に「ドボルダン（こんにちわ）」と、にこやかに握手を求めてくれ我々もそれに答えた。昨年来日したメンバーに二〜三名の補強をしていたが皆なじみのある顔である。前半15—8となかば試合を決められた

○……今回の世界選手権で各国はミュンヘン後どの程度メンバーを入れ替えただろうか。
オリンピックにおける採用は世界選手権をオリンピアードの中間年のエベントにかえ（あるいはこの考えはオリンピック至上主義の日本独得のもので、世界選手権の中間年にオリンピックがある、というほうが正しいかもしれないが）、各国の頂点強化施策に微妙な変化の兆をのぞかせはじめている。

○……ミュンヘン五輪のプログラムと、今回、報道関係に配送された選手名簿をもとに調べてみると別表のようになった。
連続出場とはミュンヘン―今回を指し、復帰とは第7回世界選手権（昭45、パリ）に出場しながらミュンヘン代表にもれていた選手で、西ドイツのムンクシュミット、日本の藤中などだ。

○……今回の主力が、2年後のモントリオールオリンピックでも中心となることは明きらかでさすがに各国とも、例年とはちがって初出場組を最低3選手は送りこみ、連続出場者より「初」が上廻っている国が5カ国もあったのは注目してよい。
初出場者8人の東ドイツが準優勝したことで、モントリオールの金メダルは、早くも同国を一番手に推す人もいるほどだ。

○……日本は桁はずれ。思い切りがよすぎた、という内外の声も肯けぬことはない。それに、各国と差があるのは、新人でも公式国際試合が平均25試合をこしている点である。ナショナルプレイヤーになるまでのキャリアをうかがわせる。

○……全般的な印象としてはグルイア(ルーマニア)、ルブキング(西ドイツ)、マロシ（ハンガリー）などの〃引退〃はあったものの、各国の主軸はいぜん変わらず、じっくりと新旧交代を策しているといってよい。
東ドイツ、ハンガリーをはじめ日本の長期策戦や、かってない切り替えでベストへ返り咲いたデンマークなどの〃若返り〃勢が、その効果をどう表すか。評価はやはりモントリオール後ということになろうか。【杉】

| | 連続出場 | 初出場 | 復帰 |
|---|---|---|---|
| ルーマニア | 12 | 3 | 1 |
| 東ドイツ | 7 | 8 | 1 |
| ユーゴ | 11 | 5 | 0 |
| ソビエト | 10 | 5 | 1 |
| チェコ | 10 | 6 | 0 |
| ハンガリー | 6 | 9 | 0 |
| ポーランド | 10 | 6 | 0 |
| デンマーク | 7 | 9 | 0 |
| 西ドイツ | 6 | 8 | 2 |
| スウェーデン | 8 | 7 | 1 |
| 日本 | 3 | 9 | 1 |
| アイスランド | 9 | 6 | 1 |
| スペイン | 13 | 3 | 1 |
| アメリカ | 11 | 3 | 0 |

が、後半は失点を抑える事だけを目的に行なったが、結果は36―24と完敗であった。ロングシューターとポストマンの絶妙のコンビプレー、日本が得意とする速攻も逆にユーゴのものとなっていた。エントリーメンバーをフルに生かして、オフェンス、ディフェンスをうまく使い分ける相手に対し、終始ペースのつかめぬまま終わった試合であった。日本の防禦力の課題がそのまま出た試合であった。

第二戦は、ユーゴの主力であるポクラヤクの生まれたパンチョボの体育館で行なわれた。観衆も第一戦より多く、太鼓、笛などの鳴る騒々しい応援の中で、前半は一点を争う好ゲームを展開した。第一戦の反省を基に防禦の徹底、そして攻撃はユーゴの一・二・三システムをポストの動きと早いボール回しで徐々に崩していき10―12で前半を終了した。このペースを後半も続ける事が、我々の最も重要なポイントであったように思うが、後半のなかばすぎから相手のスピードに押され始め、防禦の要であった中井選手の負傷退場後は攻撃でのミスが連続して発生し、そのまま失点に結びついていった。特に後半、第一戦でも見られた息切れが感じられ、防禦の甘さをつかれた感がある。チームのペースを全員がつかみ、防禦力が世界選手権で勝負につながるであろうという事を体で感じとった経験が、大きな収穫であったと思う。又、日本が従来得意としていた速攻やスカイプレーなどは、この二試合では発揮できなかった。それは、相手の早い潰し、パスコースに入りながらの早い戻り、そしてサイドに至ってはほとんどマンツーマンでマークされているなどの点である。体の小さい我々のようなチームは、このような問題に今後何度も遭遇するであろうと思う。攻撃面の問題も、守備面の問題といっしょに解決していかねばなるまい。国際試合で、十点差をつけられるという事は、A級とC級の力の差があるといえるのではないかなどと今さらながら本場の強さを認識することが多かった。

桧舞台登場への緊張を前にベオグラードの街の西方にある中世の城跡から眼下に眺めるドナウ川の雄大でそして優雅な流れがこの遠征をより印象強いものにしてくれた。

（FP、早大）

**プリバニッチ姿消す**

すっかり顔なじみとなった日本とユーゴ。たがいの消息交かんも親しみにあふれたものだが、昨秋来日の14名のうち速攻の主役プリバニッチだけが今回のエントリー（世界選手権）からはずれていた本番ではホルバット主将が20ゴールで気を吐いたほか、LL砲は二人で35ゴール。

# ハンドボールを〝社技〟に採用 BSタイヤ

ブリジストン・タイヤでは社員の健康、体育のためハンドボールに着目、〝社技〟として奨励しているが、このほど同社人材育成研修所（福岡県久留米市）の体育館で、各工場から集められた42名のリーダーに対し「ハンドボールトレーナー」の研修を行った。

同社では、ルールが比較的簡単で誰にでも手軽にでき、そのうえ身体の調和的発達や、産業人にもつとも必要な安全能力に役立つスポーツとしてハンドボールを高く評価、かねてから熱心な指導を行っているが、今回の研修は、毎日午前6時から午後10時までというハードスケジュールのなかで、競技規則、基本動作、指導法、審判法などを5日間にわたって指導するという徹底ぶりだった。日頃激しいスポーツに遠ざかっているリーダーたちは、歯をくいしばりながらも習得に懸命で、最終日の交歓試合では、最初の頃とは見違えるようなボール捌きを見せ、指導にあたった人たちも、感無量の面持ちだった。

閉講式では、各職場へのハンドボール普及を誓いあい、それぞれの工場に散っていったが、これらのリーダーたちによる〝成果〟は6月23日久留米工場で開かれる予定の「全社ハンドボール大会」にあらわれるわけで、社内では、今からその話題に花が咲いている。

なお、研修最終日には、熊本から井薫氏（48年度全日本女子監督）が招かれ、実技、審判法について指導を行ったが、同社では各工場の最寄のハンドボール関係者の指導と支援を望んでいる。（長野農夫男・福岡協会理事）

◇

編集部に連絡されたブリジストンタイヤの工場所在地は次の通り

栃木（黒磯市）、那須（同上）、上尾（上尾市）、東京（小平市）、横浜（横浜市戸塚区）、彦根（彦根市）、下関（下関市）、鳥栖（鳥栖市）、久留米（久留米市）、甘木（甘木市）、熊本（玉名市）。

# 愛知教員が韓国へ遠征

昨年度全日本教職員4位の愛知教員クラブ（伊藤和夫団長、角紘昭監督ら役員7、選手21名）は3月24日から28日まで韓国に遠征、釜山、ソウルなどで地元チームと3試合を行い2勝1引分だった。

▽第1戦（3月24日・釜山）
愛知教員 16（9－6、7－3）9 釜山教員

▽第2戦（3月25日・ソウル）
愛知教員 20（13－5、7－9）14 韓国外語大

▽第3戦（3月27日・ソウル）
愛知教員 15（11－10、4－5）15 ソウル教員

〈後記〉今回の親善試合は、釜山とソウルでの試合であり、しかもソウルでの滞在が主であったため韓国のほんの一部分にしか接する

| 得 | 【愛知】 | | 【ソウル】 | 得 |
|---|---|---|---|---|
| 0 | 竹内 | GK | 崔大浩 | 0 |
| 0 | 梶田 | GK | 沈亨変 | 0 |
| 3 | 斎藤 | FP | 成鐘元 | 0 |
| 3 | 松浦 | FP | 金浄変 | 0 |
| 2 | 長縄 | FP | 白武男 | 2 |
| 6 | 深津 | FP | 徐康錫 | 2 |
| 0 | 細川 | FP | 高炳勲 | 2 |
| 0 | 松本 | FP | 李文植 | 1 |
| 1 | 川島 | FP | 柳在忠 | 2 |
| 0 | 山田 | FP | 金甲経 | 3 |
| 0 | 小山 | FP | 孟正述 | 0 |
| 0 | 細井 | FP | 朴鐘甲 | 3 |
| 15 | （2） | 7MT | （3） | 15 |

（審 李康憲、李時黙）

▽交代【愛】FP本多、古賀、富田（いずれも得0）

機会がなかったのは残念であった。

しかし、教員チームということで、慶熙大学付属の国民学校と女子高・中学校の訪問及び、外国語大学での視聴覚教育の見学が行程に組まれていたのと、ちょうど、ソウル滞在中、高・中学校の全国大会予選兼日韓高校親善試合選抜の予選が行なわれており、韓国ハンドボール界の一端を見ることができたのは幸いだった。

高校・中学の大会を見て、その闘志は目を見はらされるものがあり、日本では想像できないほどのもので、特に、試合そのものに対して、又、ボールに対しての執着心の強さは、我々も多いに見習うべきと痛感させられた。さらに、応援も、自校の試合の時間には、生徒がぞくぞくつめかけ二千人以上が、プレーの一つ一つにかん声をあげ、時にはレフェリーのホイッスルも聞き取りにくいほどであった。このような応援の中でプレーできる高校生や中学生がうらやましく思われたと同時に一般生徒への普及に感心した。同じ会場で行なわれた我々とソウル教員の試合も、やはりプレーがはげしく、又、応援の多い中で行ない3戦のうちもっとも緊張した試合となった。

外国の状態を直接肌に感じ、刺激を受け、視野を広めてゆくことは、ハンドボールをする上でも又教師としても非常に有意義なことであり、今後こうした交流の機会が増すことを望みたいと思う。

おわりに今回の遠征にあたり、非公式なものにもかかわらず、日韓両国の方々から御協力をたまわりましたことを厚く感謝いたします。（浅田邦雄・遠征選手団総務名古屋市立中央高教諭）

# 各地の記録

▼茨城県一般春季選手権（4月・自衛隊勝田）＝男子のみ

▽予選リーグA組
自衛隊勝田 21－13 茨城大
茨城大 25－20 新治ク
自衛隊勝田 28－9 新治ク

▽同B組
原研 27－12 古河自衛隊
古河自衛隊 19－15 土浦三高OB
原研 28－10 土浦三高OB

▽3位決定戦
茨城大 17－6 古河自衛隊

▽決勝
自衛隊勝田 24（11－6、13－3）9 原研

## 男子は丸善石油が快勝

▼第9回和歌山県下室内選手権（3月・打田町立体育館）

▽男子準々決勝
丸善石油 21－3 桐蔭OB
那賀高 11（延）9 御坊商工高
御坊OB 13－12 丸善スワロー
住友金属 10－3 市和歌山商高

▽同準決勝
丸善石油 16－8 那賀高
御坊OB 10－9 住友金属

▽同決勝
丸善石油 15－7 御坊OB

▽女子決勝リーグ
粉河高 8－6 県立和歌山商高
御坊商工高 6－4 県立和歌山商高
粉河高 5－4 御坊商工高

【順位】①粉河高2勝②御坊商工高1勝1敗③県立和歌山商高2敗

九州高校生選抜

# 久留米工と熊本女商勝つ

第2回九州高校生選抜大会は3月28日から30日までの3日間、北九州市立総合体育館で開かれた。

沖縄県は不参加だったが九州7県から男子16、女子15校が出場、予選リーグのあと、ベストフォアによる決勝トーナメントを行い、男子は福岡同士の優勝争いとなり久留米工が、後半一気に若松を押し切り初優勝、女子は熊本勢の争覇で、熊本女商が、延長の末、熊本市立を降し、栄冠を手にした。

▽男子予選リーグA組

鹿児島工 19—4 佐賀商
若松(福岡)28—5 大分商
大分商 12—6 佐賀商
若　松 23—6 鹿児島工
若　松 27—6 佐賀商

▽同B組

鹿児島工 15—9 大分商
熊本一工 14—6 長崎工
久留米工(福岡)17—13 大分東
久留米工 8—6 熊本一工
大分東 18—11 長崎工
大分東 15(分)15 熊本一工
久留米工 18—10 長崎工

▽同C組

済々黌(熊本)19—13 佐賀農
福岡工 6(分)6 都城泉丘(宮崎)
都城泉丘 25—9 佐賀農
済々黌 11—8 福岡工
福岡工 16—8 佐賀農
済々黌 13—10 都城泉丘

▽同D組

鹿町工(長崎)22—6 隼人工(鹿児)
小倉西(福岡)20—11 宮崎工
鹿町工 23—8 宮崎工
小倉西 13—10 隼人工
小倉西 9(分)9 鹿町工
隼人工 10(分)10 宮崎工

▽同決勝トーナメント1回戦

久留米工 13(7—6、6—6)12 済々黌
若　松 8(6—3、2—2)5 鹿町工

▽同決勝

久留米工 12(5—5、7—1)6 若　松

▽女子予選リーグA組

神埼農(佐賀)7—3 佐世保北(長崎)
都城西(宮崎)7—6 筑紫女(福岡)
神埼農 12—3 都城西
佐世保北 5(分)5 筑紫女
神埼農 6—1 筑紫女
佐世保北 8—5 都城西

▽同B組(3校)

熊本女商 7—6 財部(鹿児島)
熊本女商 11—3 福岡女
財　部 7—6 福岡女

▽同C組

国分実(鹿児島)5—4 島原農(長)
別府青山(大分)8—4 福岡女商
島原農 7—6 別府青山
国分実業 12—7 福岡女商
島原農 12—4 福岡女商
国分実業 8—6 別府青山

▽同D組

熊本市立 11—10 小林商(宮崎)
大分東 7—4 古賀(福岡)
大分東 7(分)7 小林商
熊本市立 14—5 古　賀
大分東 7(分)7 熊本市立
古　賀 10—7 小林商

▽同決勝トーナメント1回戦

熊本女商 10(4—2、6—3)5 神埼農
熊本市立 9(3—3、6—2)5 国分実業

▽同決勝

熊本女商 13(6—3、3—6、……、2—1、2—0)10 熊本市立

---

投書欄　明日への提言

## 「高校選抜大会」の検討を

春の高校スポーツエベントが3月末から華やかに行われていましたが、ハンドボールがないのはいかにも残念です。

関係者のかたは、いろいろと検討はされていると思いますが是非、この2〜3年のうちに、「センバツ高校ハンドボール」を開催されるよう希望いたしたく存じます。

機関誌によれば、来年から国体は高校の部が少年の部と変わりますそうで、そうなると、これまで、高校選手にとって年間の目標（全国大会）は、インターハイだけになります。

私の住んでおります東海地区は、昨年からブロック高校大会をこれまでの6月だけから、2月にも設け、部員たちに大きなはげみになっています。

全国大会も是非、夏と春に開かれるよう期待したいものです

すでに各県では、秋以降にほとんど、新人大会を開いているのですから、体制づくりはわりあい楽に進めると思います。

全都道府県参加がむりなら、ブロック代表による16校程度のトーナメントでも最初はよろしいかと考えます【愛知・KA生　高校指導者】

---

## 長野協会の新役員

長野協会はこのほど49年度新役員を次のように決め発表した。

▽会長　戸塚一（県会議員）▽理事長　柳沢民弥▽理事長代理　加藤雅之▽常任理事　小田川利男、中沢正己、望月豊、臼田清次、中島恒夫、青木崇

【訂正】本誌前号12頁2段目左から5行目を次のように訂正「中大の山村、法大の川島らを……」。

---

## ★編集後記

□……ゼネストを頂点とする春闘の波をまともにうけ、先月号が、皆様の手に届いたのは4月のなかばになってしまったようです。東京近郊の読者から「早く読みたい、日本協会へ取りにいく」という電話も寄せられましたが、待っていて下さる皆さんに申訳けなく思っています。

□……今月号にも、この影響は大で、依頼原稿の配達が遅れたため、いろいろなしわ寄せが起き、一部、次号まわしになったものもあります。御了承下さい

原則として記録以外の〆切りは毎月10日、タテ書き（用紙自由）。ハンドボールに関することなら、なんでも受けつけるつもりです。

□……多くのかたから要望のある写真特集。光島磯雄氏のご厚意で試みることができました。

渡欧して撮りまくったなかから提供されたもので、この場を借りてお礼申しあげます。

今後も、素材、作品など特集を組むにたるエベントを見つけるつもりです。

□……いよいよ新シーズン。モントリオールのあし音もそろそろ聞こえてきそうです。去年にまさる活気を期待したいものです。

（S・S）

日本ハンドボール協会編
『ハンドボール』
第一一九号
昭和四十年六月七日 第三種郵便物認可
昭和四十九年四月二十五日印刷 昭和四十九年五月一日発行
発行所 日本ハンドボール協会
東京都渋谷区神南一ー一ー一
電話 大代代(467)三一一一
振替 東京五八三四八番
編集兼発行人 保坂周助
定価二百五十円（年間購読料二千三百円）